
等身大に、奇々怪々

怠惰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

等身大に、奇々怪々

【Nコード】

N5942C

【作者名】

怠惰

【あらすじ】

特に恵まれたわけではない生活。平凡から逸脱しない人生。満点と言えはしないが、不満があるわけでも無い。対人関係にストレスを感じることも……とグダグダいうのもなんだし、とどのつまりは単なる高校生とその周りの奴らとの、どこにでもあるような日常の話。ただ最近になって、周囲に味噌が変わった味噌汁くらいの違和感、というか……まあ、それもまた、普通のことたる？ 多分

0・始まる前の朝の始まり

「はよ」

「おはよ」

毎朝繰り返される挨拶を今日も交わす。

冷やかな水で顔を洗ったにも関わらず、まだ霞がかかったような感覚の残る頭を寝癖で飾り立て、雲の上を歩くような感覚でリビングのソファーまで歩いていくと、そのままぼてん、と顔から倒れ込む。

「……………うあー……………」

低血圧の人は朝に弱いというのは何の根拠も無い俗説うー、なんてとりとめもないことを頭の片隅に浮かべながら、そのままの姿勢で2、3分の時を過ごす。

「……………つぢゃいっ!」

と、不意に奇声を上げて起き上がり、そして着替えるためにまた部屋へと戻る。

自分でも全く無駄な行動をしていると自覚しているのだが、朝はこのルーチンをこなさないことにはどうにも起動スイッチが入らない。母も子供の頃から続いているこの奇行にすっかり慣れ、今となっては特に何を言うでもない。一日乗り切るための気合いを入れる俺な

りの儀式のようなものだ、とよく分からない納得をしているようだが。

カラーが少しへたった学生服を羽織り、数冊の教科書の入った薄いカバンとジャージ等が入ったバッグを掴み再度リビングへ。

テーブル上の少し冷めた朝食のおかずの内容を確認し 父の出勤時間が早く、その際に家族全員の朝食をまとめて作ってしまったため 茶碗に控え目にご飯をよそる。

「牛乳は？」

「父さんが全部飲んじゃった。お茶でいい？」

「ん」

報道番組のアジア諸国を名を聞いたことすら無いアナウンサーが巡るといふ企画を見ながら、目玉焼きの黄身を潰す。今日は少し固め。

熱い茶を吹き冷ましながら啜り、4、5分の余った時間をぼんやりと過ごす。

「……………うし。んじゃま、そろそろ」

久々に使用した自分用の湯飲みを流しに浸け、バッグを背負う。

「つてきまー」

「いつてらっしやーい」

ドアをくぐれば、ようやく春らしくなってきた陽気と小鳥達の囀りが心地よく体に染み渡る。

何のとりえも無い俺の、何の変哲も無い一日の始まりである。

0・始まる前の朝の始まり（後書き）

あまり声を大にして言うような事でも無いですが、これが初投稿となります。

ペンネームに「怠惰」なんていうふざけたものを使っておりますが、筆が遅いのは別に怠けている訳ではありません。

……単純に實力不足です（それこそ声を大にしていうような事でも無い）

アドバイスや誤字の指摘、感想から拙文への批評までどのような事でも言っていたいただけると励みになります。この文の集まりについて思ったことがあれば気軽におっしゃって下さいませ。

1・愚者と隠者、友人につき

私立高校の何がいいかといえばとにかくエアコンがあることである。公立との間にある授業料の差を考えるとその程度些細なことと思えなくもないが、少なくとも俺はそれを基準にして受験校を決めた。

小学生の頃はいくら暑い夏であろうと雪の吹きすさぶ冬であろうとボールを追い追いかけて回っていたものだが、中学生にもなるとそういうわけにもいかない。

夏は窓際の席を求めて席替えの場合は戦場と化し、冬はドア付近の席を避けて以下同文。一日の生活の半分近くを過ごさねばならない場所です。暑い寒いなどの対処しにくい面倒な問題を抱えていたくはない。

というわけで、大勢のクラスメイト達が近場の公立高校や手頃な私立へ進学する中、俺は近所ではそこそこの有名私立の進学校へ進んだ。

といっても所詮は地元レベルの話であり、全国的にはたいしたレベルでもないどこにでもあるような高校である。1年以上通っていればそれは身に染みて分かる。

話の始まりは、殆どの生徒が入学後から続く気の緩みと進学校の響きによる根拠の無い余裕から成績を落とし、それに危機感をもった者達が学年の推移を機に予備校なり塾なりに通い始める、または検討を始める、そんな時期のこと。

ぶつちやけて言えば俺が高校二年生になった四月のことだ。

教室に入り、バッグを椅子の下へ置いてカバンから数冊の教科書と

ノートを取り出す。宿題の出ている科目だけ持ち帰っているのだ
いた量にはならない。予習復習？天然キャラが売りの芸能人の私
生活並に興味ないな。

「ようマサ、俺はお前の事だけはっ！」

「全く、ほれ」

いきなり背後からがっしりと肩を掴んできた人物に、苦笑を浮かべ
ながら二冊のノートを渡す。

「おっ、悪いなマサ。毎度のことながら」

「言つとくが、ちゃんと答えが合ってるか分からんぞ。途中の説明
も適当だし、どうせなら那佐のを借りたほうが賢明だと思うが」

「いや、俺もそう思って先に那佐の方に行ったんだけどあっさり断
りやがって。んで、仕方ないから次善策としてお前」

「亮二、やっぱノート返せ」

「ちよっ、おま、そりゃねーってマジでっ！」

ノートへと伸ばした俺の手を素早くはたき落とし、亮二は素早く机
の間をすりぬけて逃げていく。

「感謝してるっていやホント。午後までには返すからさー！」

「アホ、物理は三限だったの！ とっくと写せ！」

手に持ったノートをひらひらと頭上で降り、亮二は窓際の自分の席へと戻っていく。

「ったく、ホントあいつは人生楽に過ごしてるよな……。と、そういえば」

教科書を机の中に押し込んでカバンを横に掛けて、俺は一番前の真ん中、いわゆる特等席と呼ばれ誰もが忌避する場所で黙々と本を読んでいる那佐の元へ向かう。

「よっ」

「……ああ、おはようマサ」

顔だけを動かして那佐がこちらに視線を向ける。目元を覆う癖のついたボサボサの髪と黒い太縁の丸眼鏡、それに物静かな性格の上に読書好きで、一人していると黙々と本を読み耽っている為一見アレな人物のように思えるが、実際は外見にあまり　　というよりほとんど　　気を使わないだけで決して特異な人物ではないと理解している。

「ん、珍しくハードカバーだな。何て本？」

膝の上に広げられた本に目がいき、なんとなく尋ねてみる。那佐は最近よくテレビで聞くタイトルを口にし、

「たまにはファンタジーもいいかと思つて軽く読んでみたが、なかなかいい話だった」と評価した。

「話だった、つてもう一度読んでるのか？」

「ああ」

話の分かっている本を読んで面白いのだろうか、普段あまり読書をする事がないのでよく分からないが。

「本の読み方は人それぞれだが、俺の場合二度目は伏線になっている部分などを探しながら読むようにしている。これはこれでまた楽しいものだ」

「ふうん、そんなもんかねえ。 と、そうだ。日曜なんだが……」

そうして暫く話しているとチャイムが鳴り、他の生徒たちは席に戻り始める。

「……分かった。亮二と徹にはもう話をしたのか？」

「いや、これから。んじゃ、そろそろ席戻るわ」

「ああ」

会話が終わると那佐は再び顔だけを動かして読書に戻る。

その2分ほど後に担任が教室にあらわれ、HRが始まった。

2・太陽、愛玩動物につき

「マジで？ うわー、なんかなんねーの？」

「悪いが今回はちょっと厳しい。俺が抜けると他に人がいないらしいんだよ」

午前の授業が終わり学食へと向かう途中、亮二に誘われた日曜のあるバンドのライブイベントに行けなくなったことを伝えた。

目立ったヒット曲も無く知名度もあまり高くないが、他に無い独特の雰囲気を持っていて根強いファンが多く、亮二もその一人らしい。そのバンドのライブチケットが手に入ったので、俺達四人で行こうという話になっていたのだ。

10

「悪いけど他のやつ誘ってくれ。最悪うちの妹に話を通しても構わんが」

「いや、リつちゃんの耳に合うような音じゃないと思っし、そこは俺でなんとかしてみんよ」

「そうか、悪いな」

券売機でA定食の食券を購入し、調理場のおばちゃんに渡す。

俺は普段弁当を持参しているのだが、昨夜の献立やおかずの消費具合によつて今日のように学食になることがある。

出された椀と皿をトレイに乗せ席を見渡すと、既にカレーを食べ始めている亮二と弁当の包みを開いている徹の巨体が見えた。

「よ、徹。……今日もまた随分と愛の溢れる弁当だことで」

徹の隣にトレイを置き、弁当の内容を覗いてからかい半分に話し掛ける。

「そ、そんなんじゃないって……」

「いやいや、いいことだ。麗しき姉弟関係、世は今も昔も愛によりてまわりけり、ってか」

「別にそんなたいしたことじゃないよお」

綺麗に焼け色のついた玉子焼きを口に運びつつ、徹は困ったように眉をひそめる。

三人の姉に可愛がられて十六年、190cm超の巨体に秘めるは謙虚な心と乙女な思考。無垢の胴着に身を包み、右の腕にフライパン、左の腕に裁縫用具。

刮目せよ、彼の者の名は榊木徹、我等が誇る天下無二の萌え要員なり！（ただし変化球）

……とまあ阿呆くさい煽り文は捨て置き、この榊木徹なる男、ニメ

1メートル近い身長に対し体重は75キロと細身、かつ童顔である。

年の離れた三人の姉に小さな頃から料理やら裁縫やらを手取り足取り仕込まれ、今も休日には家族に昼食を作ったりしているらしい。また空手の段持ちと隠れた武闘派でもあり、なかなかアンバランスなスペックの持ち主である。

「姉さんたちも仕事があるし、そのついでに作ってくれてるだけだよ」

しっかりと咀嚼して嚥下した後におっとりと徹は語る。その辺りも姉仕込みだろうか。

「いや、肉に野菜、豆類、海藻と実に手の込んだこの献立。マサの冷食がぎっしり詰まった弁当とは格が違う。同じ弁当というカテゴリーに分類することすらはばかれる。あえて言おう、ついでに作るってレベルじゃねーぞ、と！」

「それで僕にどうしろと……」

「つか、俺のお袋に喧嘩売ってんのかお前」

「マサの弁当に足りない物はっ！ 情熱思想理念頭脳優雅さ真面目さ勤勉さ！ そして何よりもおっ！」

「愛が足りない？」

「決めを取られた！？ しかもよりによって徹にっ！ ……はっ、この状況。俺が遅い！？ 俺がスロウリー！？」

「飯の時間くらい黙れんのかお前は」

微妙に分かりにくいネタだし。

「しかし徹にこのネタが通じるとは……お美事にございまする」

「いや、丁度見てたから……って、それも元ネタがあるの？」

「気にするな」

そっちは徹が見たら失神しそつだ。知らぬが仏。

「それより徹、日曜なんだが……」

「うん、コンサートだったけ？」

「ライブな。いや、間違つてないといえばそうなのかもしれんが。ちよつとバイトが抜けられなくて、悪いけど行けなくなった」

徹は眉をひそめ、むーと残念そうに唸る。

「そうかー。でも、また今度暇が出来たら皆でどこか行こうよ。今回は仕方ないけどさ」

「応、とりあえず日曜は俺の分まで楽しんで来てくれ。土産は温泉饅頭がいいな」

「が、頑張るよー！」

「何をだ！ なんもん売ってる訳ねえだろ、考えて返事しろよ徹！」

「饅頭……そういえば那佐くんは？」

「今お前の頭の中でどう話が繋がったのか分からんが、そういえば遅えな、那佐のヤツ」

首を伸ばして亮二がきよろきよろと辺りを見回す。

「さっき食券に列んでたから、今頃順番待ちじゃないか？」

「どれどれ……お、ホントだ。ありゃまだ五分はかかるな」

「んじゃ急いで食おう」

「ひどっ！そこはゆっくり食べてあげようっ」

「なに、冗談だ。マイコオの鼻〓着脱可能というようなもんだ」

「あながち冗談でもねえ気もするぞ、それ……」

そんな昼休み。

3・女教皇、同僚につき

それからは特に何事も無く日曜日。

亮二の後輩にそのバンドに興味があるやつがいたので、そいつにチケツトを譲ったらしい。

交換条件で何人かの女子のメアドを聞き出したらしいが……まあ健闘を祈るくらいはしてやろう。

祈るだけならタダだし。

「ごめんなさいね、私の為に友達を裏切るような真似をさせて」

「何魔性の女気取りの台詞吐いてるんですか。つかどの面下げてここまで来やがったこの給金泥棒」

「激しく機嫌悪いわね。何かあったの？」

「その平らな胸に手を当ててよく考えてください」

「あらやだ欲求不満？」

「だから考えて話せと！」

赤岳頼子。同じバイト先に勤めるフリーター。自称永遠の十七歳。

都会の灯に誘われた夢追う旅人などと吹いていたが、実態は二十歳を過ぎても働かないので親に家を追い出されたのだろうと推測。自活能力が著しく欠けている、典型的な駄目人間。料理とかできるんですか、と聞いたところ各種コンビ二弁当についての所感を熱く語られた。早死にしてみえ。

「頼子さんが来れないと連絡があったから今俺がここで友人の誘いを断ってまでして店番についている訳ですが？」

「いや、ほんとに今日は無理だったのよ？ けど寸前で相手方の都合で予定をキャンセルされちゃって。」

狭い部屋の中でテレビとパソコン相手に無駄に時を過ごすなんて勿体ないじゃない。人生限られてるんだし、生産的に生きなきゃ駄目よ」

フリーターが何を言うか。

「ではここに来る事がどう生産的なの？」

「生産的な会話でも楽しもうかと思って」

「ここでやる必要無いだろこのチャバナゴキブリが、という思いはさておき、例えばどんな話を？」

「男女間に於ける性交渉時の」

「それは猥談だ！」

「子供ができるから生産的じゃない」

「あんだ、生産的って言葉を意味分かって使ってないだろ」

輸入雑貨&骨董販売店イシユタール。

繁華街の大通りから一本裏に入った通りのビルの一階を借りている個人経営の店である。

民族風の装飾品に始まり西洋甲冑や桐の箱に入った茶碗や掛け軸、果てはメイド服に呪いの人形まで置いてある混沌とした品揃えが特徴。

普段は閑散とした店舗内で店番や在庫整理をして過ごすのだが、今日のような休日には人通りの多いメインストリートに出店を出して若者向けのお洒落な雑貨を販売している。

実の所、この週一の出店での売上が月全体の収入の半分近くを占めているため、何か事情でもない限りはバイトに呼び出される事になる。

とはいえ最近はいい金蔓……じゃなくて常連でも出来たのか、新しくバイトを雇って合計で二人から四人になり、呼び出されることも以前に較べ少なくなった。

また、当の昔に還暦を迎えている店主たる老夫婦は、面倒で慌ただしい出店の管理は俺のようなバイトに任せつきりにして、店舗内でNHKなんぞを見ながらのんびり茶を啜って週末を過ごしている。まあ、それなりのバイト代を貰っているので特に文句などは無い。つか、歳の割にこういう若者向けの商品選びのセンスには長けているのが驚きだ。

「ところで私、お腹が空いたわ」

「そうですか。もう夕方ですしね」

「おおっと、偶然隣にはクレープの出店が！」

「そうですね。いつもの事ですけどね」

「私は甘いものが大好きでねえ、マサッチも確かそうですね？」

「そうですね。でも頼子さん前にスープの底まで真っ赤な坦々麺をぺろっと完食してましたし、別に甘党という訳でもないですよ」

「ぶっちゃけクレープ食べたいから金を出しなさい」

「ここまでやっていきなり直球勝負に出るんじゃないか！」

「バイト代が出たばかりでしょう？ほんの千円くらい、別にいいじゃない」

「バイト代に関してはあなたも同じでしょう。そもそもなんで俺が奢る必要がある」

「なに、女に金を出させるの？全く駄目な男ねえマサッチは」

「未成年にたかる駄目な大人が何を言う」

「つつさい童……貞？」

「断言されるのもムカつくが疑問系もそれはそれで頭にくるなあおい！」

「マサつちの事だから何人もの女の子を鳴かせた過去があっても不思議じゃないし。で、どっち?」

つか、鳴かせるとか言うな。

「答える義務は無い」

「私曖昧なのって嫌ー。確認するのも面倒だしこの場で押し倒してカラダに聞こうかしら。あら、あれって警察? まあいいわ。別に補導レベルで済むでしょうし」

身の安全と引き換えに俺の財布から野口さんが一人消えた。

「なんでクレープってあんなに高いのかしらね? バナナなんて百円あれば一食分は楽に買えるでしょうに」

「商売だからでしょう。というかいつまでも前に立たれると邪魔なのでどいてください。つかむしろそれ食ったら帰れ」

「それじゃ隣を失礼」

そう言っただけで彼女は広げられた商品を挟んだ対面から移動し、……俺の膝の上に腰掛けやがった。

「……………隣?」

「うふ。たった今頼子さんフラグが立ったのよん。後は選択肢を間違えなければそのまま頼子さんルートに突入よ」

「んなもんへし折ってくれる」

「休日にはったり遭遇、一緒に食事、身体接触。故事宜しく三本集まればなかなか折れないわよ？」

「なら放っておいて朽ちるのを待つ。つか、どれもこれもあなたの意図的な行為じゃないですか。おまけに一緒に食事って何だ。頼子さんがクレープを一人で食ってるだけでしょう」

「いや、それはこの後の予定だけど」

「飯まで俺にたかる気か！ 流石にそこまでする気はねえっ！」

大体食事なら家に用意されてるだろうから外食の予定は無い。

……俺の家に押し入るといふ選択肢をこの女性が持っていないことを祈るばかりだが。

「仕方ないわね。じゃ……」

と、不意に頼子さんは俺に対して90度横になるように体をずらし、更に上体をこちらに捻った上で食べかけのクレープを俺の口元に突き出して、

「はい、あーん」

なんてことをのたまった。

「……………」

いや、別に彼女に気があるという訳では断じて無いのだけれど。

お互いの体は密着してるし顔は近いしぶっちゃけ頼子さんって性格はあれだけど外見は綺麗な人だし、健全な男子としては脳がフリーズしてもおかしくないというか当然の状況でして。

これ間接キスだけど気にしないのかな、とか小柄な人なのは分かってたけどほんとに軽いな、とか抱きしめたら柔らかかそ

(いやいやいやいや！)

危ない、なんだか今物凄く危険な思考が頭を過ぎったぞ。ホントこの人に対してそういう気持ちは無いんだって。

落ち着け俺、be coolだ、と心の中で言い聞かせ、すっと顔を傾けて端の方を一口かじる。

「美味しい？」

視界の半分をにっこりと微笑を浮かべた頼子さんの顔が占める。口の横にチョコが付いている。

「……………生クリームと小麦粉の味しかしませんね」

っーかむしろ何の味もしない。舌と歯に固形物の感触が無かったか

らそう言ったただけだ。

「まあ端っこだったからね。真ん中食べればいいのに」

「真ん中食べたら怒るでしょう、美味しいところ食べられたーとか言つて。つか、満足したならどいてください。人の目があるんで」

はいはい分かったわよ、などとぼやきながら頼子さんは俺の膝の上を離れ、ようやく本当に隣に座る。

その時彼女の髪が鼻先を掠め、ふんわりと花のような香りを残していったが強制的に意識から排除。心拍数は100を軽く超えていそうだが、顔は赤くなってないだろうか。夕日のせいにしてうまくごまかせるだろうか。

「うふふふふ、ここにマサっちの唇が触れたんだね。じっくりはむはむして味わってあげよう」

「やめんかいこの痴女が。残りも全部食うぞ」

「からかい甲斐がないわねえ、食べかけのクレープは素直に食べるし乾いた感想を返してくるし。少しは恥じらったりしなさいよ」

「その言葉、そっくりそのまま返してあげます」

普段通りに振る舞うことが出来ているだろうか。

「というか、口の端にチヨコ付いてますよ」

「嘗め取って頂戴」

「あまりおいたが過ぎるようなら終いには殴るぞ」

まあ、大丈夫だろう。

それから一時間程過ぎ、電灯の光が強く感じられるようになった頃店じまいを始め、それが終わる頃には周囲はもうすっかり暗くなっていた。

因みに頼子さんは片付けを始めようとした途端にふらふらと帰っていった。いつか何らかの痛い目に逢わせてやるつと強く心の底で思った。

3・女教皇、同僚につき（後書き）

別名「頼子」、二人称が安定しないにつき」の回。

ホント、直す前は「あんた」「お前」「貴様」など不穏なものから「頼子」なんてお前達どんな関係だよ、なんてものまで色々混在してました。

結局は「頼子さん」及び「あなた」という非常に妥当なものに決まりましたが、話の筋よりむしろこっちに気を使ったような……

今回は下気味のネタが多く含まれている為不快に感じられた方もいらっしゃるかもしれませんが。作者としてはこういう阿呆な掛け合いが好きなのでノリノリで書いてましたが。

その辺りの見極めも含めて色々技術を身につけなくちゃな、と思いました。

ちなみに、フラグはあと二人、『節制』と『皇帝』に立つ予定ですが……長い目で見てやってください。

あと、作者はタロットに詳しい訳ではないのでそのアルカナの意味する所とキャラクターの間に深い関係はありません。字面から受ける雰囲気だけ感じて頂ければ結構です。

4・皇帝、同級生につき

沢山の電灯で白く染められた道を駅に向かって進んでいく。この駅は自宅と学校の間にある。当然ながら自転車などは用意していないので徒歩である。

なんとなく空を見上げてみても、僅かに欠けた月が見えるだけで星なんて全く見えやしない。毎日星に願いをかけて、この日々を大きく変える奇跡を待っているわけでも無いが、なんとなく寂しい夜空である。

人の流れに飲まれるように移動して駅へとたどり着き、さて改札を通ろうかという時にふと視界の端に見慣れた制服がよぎり、そちらへと目を向けた。

無論のこと男子のどこにでもあるような学ランではない。女生徒用のセーラー服だ。

うちの高校は男子は何の面白みも無い学生服の癖に、女子の制服はやけに可愛いらしいものを採用している。ブレザーに憧れを抱いているわけでも無いのだが、何となく不公平な気がする。

それで、その肝心の女生徒だが、どうも券売機の前をうろろしたり鞆を漁っては肩を落したりと不審な挙動を繰り返している。

それで何となく事情は推測できたので、話し掛けてみることにした。

「あー、もしもし、その人？」

「え……はい？」

びくつとして女性が振り返る。背中にかかる位の長髪を首の辺りで一つに纏めた、所謂ポニーテールがその動きをトレースするようにくるりと回って背後へ消えた。

と、正面から顔を見た事で思い出した。同じクラスの生徒である。

……が、名前が出てこない。たぶん今年のクラス替えで同じになつたクチだろう。

「あー、と。城岡の人だよな。2Eのさ。俺も同じクラスで、宮内つつーんだけど知らないか？ 『みやうち』って書いて『くない』」

「……ああ、聞いたことがあるな。宮内雅彦、だったか。そういえば、顔も見たことがある」

同じクラスと同級生と聞いて安心したのが、ふつと肩の力を抜いたのが分かった。

無駄にセレブ臭のする目立つ名前だと常々思うところではあったが、意外な所で役に立ったものだ。

「で、どうした？ 端から見ても明らかに挙動不審だったけれども命でも落としたか？」

「死人に見えるほど私は挙動がおかしかったのか？ 落としたには落としたが、命ではなく財布を、な」

まあ、そうだろうとは思っていたがドンピシャだ。

「定期は持ってないのか？」

「財布と一緒に無くした。定期入れは別にすべきだったな。痛恨

のミス、というやつだ」

あー、そりゃご愁傷様としか……

「携帯で誰かに連絡とかは？」

「いや、携帯は持ってない。電話は使わないから必要ないと思っ
てな」

なんとまあレアな女子高生だ。こっそりお嬢様だったりしそうだな。

「んー……じゃ、まあ取りあえず金を貸そつか？」

「………すまない、そうさせてもらつと助かる。必ず明日返させて貰
う」

本当に申し訳なさそうな顔でぺこりと頭を下げられる。なんかこっ
ちが悪いことをしたような気分になるんだが何故だろうか。

「因みに何処まで行くんだ？」

「東新垣線でここから三つ行った所の、墨窪という駅だ」

「墨窪？ ああ、それなら俺と同じだ」

「そうなのか？ 奇遇だな。実穂という地名を知ってるか？」

「ああ、かなり近場だな。俺の家は水子にあるから」

「へえ、本当にすぐ傍じゃないか。偶然は重なる物だな」

と、地元談義に花が咲きそうになった所で電車がもうすぐ着きそうな事に気付き、取りあえず改札を抜ける事にした。

「じゃあ実穂に家があるのか。会った事無いから、東じゃなかったのか」

「私は台だった。距離的には東でもあまり変わり無いのだが、親の知り合いの教師がそちらにいたので誘われてな」

電車に揺られつつ、ローカルな話で盛り上がる。因みに東というのは墨窪東中、台というのは墨窪台中を指す。

「しかし、少し変わった口調で話すんだな。男らしい、ということ少し違うが、なんだか硬いというかさ」

同郷のクラスメイトとはいえまだ会って間もないので距離を置かれているのかもしれない、とも思いはしたが、それでも気になったので聞いてみることにした。

すると彼女は、あ、と何かに気付いたように少し目を見開き、苦笑を浮かべた。

「まあ、よく言われるよ。親にも女の子らしい話し方をしなさい、なんて子供の頃に叱られたものだが、どうも身に染み付いてしまっていてね。努力はしているのだが」

どうやら警戒心とは無縁だったようだ、が

「悪い、もしかして気にしてたのか？」

少し空気が変わったようだったので、聞かない方が良かったかと軽く後悔した。

「いや、まあ正直少しはな。こんな話し方をする女性を他に見たことはないし、やはりおかしいだろう？」

彼女は苦笑を浮かべ、こめかみを掻く。きっとそれが原因で何かと嫌な思いをしてきたのだろう。

だが、会ってからあまり時間が経っていないにも関わらず、俺にはその特徴的な口調を

「いや、別におかしくはない。むしろよく似合ってると思う。他の口調だと逆に違和感があるって感じかな」

そう感じていたのだ。最初に声を掛けて返事をされた時から。

ああ、この人はなんだかこんな感じの話し方が似合うな、と素直にそう思ったのだ。

「……………」

と、俺が一人でうんうんと頷いていると、彼女は驚いたようにこちらを見ていた。

「え、俺なんか変な事言ったか？」

「……………いや、私のこの悪癖についてそのような事を言われたのは初

めてだったからな。少し驚いた」

「悪癖って……そんな大仰なものでも無いと思うけど」

「今はまあ、今更取り繕うのも妙なのでこのまま話すが、普段私は家族や親しい友人の前を除いていつも違う口調で話している。何故か分かるか？」

「いや……」

「やはり、この口調が『変』だからだ。表立って言われることはないが、陰では変な女と思われる。それで学校生活がどうなるというわけでもないが、悪く思われるのはいい気分では無い」

「でも、そんなものは何の根拠も無いだろう。人に被害や不快感を与えている訳でもない。話し方が少し違うだけで」

「君は標準語を話すが、関西弁を聞いてどう思う？ 京言葉は？ 九州弁や東北弁は？ それらに何らかの先入観を持つてはいないか？ 田舎者の言葉だ、とか。」

人は仕種や外見からその人の人物像を作り上げる。その中でも特に言語というものはなかなか比重を重くしているのだよ。

その論からすると奇妙な話し方をする私はイコールで変な人間である、という結論に結び付く。それは人生経験から得られる知識の一つでもあるよ。粗暴な口調の人物は暴力的な人格の者、ぺらぺらと無駄口の多い者は軽薄な人物だろうと推測する。それは悪いことでは無い、無駄な危険を回避しようとするなら当然だ」

「そうかもしれないけど……勿体ないな、それは」

「何がだね？」

「確かにそうやって口調とその人の人物像とを結び付けやすいという事は理解できる。だけど、少なくとも素のままの君は」

「すぐく生き生きとして、魅力的に感じる。」

喉から出かけたその言葉を、寸前で飲み込んだ。

馬鹿、何をいきなり口説くような台詞を吐こうとしてるんだ俺は！

顔面に血が昇っていくのが分かる。彼女がそんな俺の様子を不思議そうな目で見ている。

やばい、気取られる前になんとか取り繕わないと。最後の言葉はなんだった？ 「素のままの君は」 「それに自然と繋がるような台詞を考え出せ。」

「別に変じゃないよ」「？
んな阿呆な台詞じゃ駄目だ。」

「十分やっていけるよ」「？
何様だ俺は。そんな軽い言葉は言うだけ無駄だ。」

「綺麗だと思っよ」「？
だからそっちの方向に持っていくな、右脳！ いや、左脳の仕業か！？」

「少なくとも俺よりは痩せて見えるよ」？

あー、なんかもう駄目だ俺。いっそのことこれでいいか

「なあ」

「ヒギイツー！」

「おおっ！？ な、なんだ急に。とにかくほら、そろそろ着くぞ」

あぶねえ、思考の迷宮に落ち込んだ。危うくミノタウロスに首を刈られるところだ。

「……って何、もうすぐ着くって？」

「墨窪駅だ。君も降りるのだろうか？」

「あ、ああ。なんだ、もう着いたのか。なんかあっという間だったな」

俺一人だったら乗り過ごす所だった。いや、そもそも俺一人なら意識飛ばす程考える事もなかったか。

「そうだな。しかしまあ久しぶりによく喋ったよ。楽しい一時は苦しく辛いときの百倍の速度で時が流れる、というやつだな」

「あー、そうだな。そーかもなーっん」

なんだか無性に疲れておざなりに返答を返す。帰ったら風呂入って寝よう。課題とかもうなんかどうでもいいや。

ドアが開くときの空気の抜けるような音に紛れて小さな笑い声がどこから零れたが、それは意識するより前に左耳からするりと抜けていった。

「わざわざ送ってくれなくとも、別に近場だから構わんというのに」

「いや、どうせ道同じだしさ。実穂ならそう遠くないだろ」

駅前の商店街を抜け、畑がちらほらと混じる住宅街を二人歩いていく。

そういえば日曜なのになんで制服なんだろう、ちょっと聞いてみようか等と考えていたら、先に彼女の方から声が掛かった。

「学年が上がってクラスが替わった際、多くの友人達と違うクラスになってしまったね」

「あー、そうなのか。俺なんか悪友ばっか同じクラスに来て辟易してるが」

特に亮二とか。対して徹と離れ離れになったのは辛かったな。生き別れの子を想う母の気持ちが今の俺ならきつと理解できる。

「それでだね。君が許してくれるなら、の話ではあるが」

そこで足を止め、こちらを振り返って俺の目を真っ直ぐ見ながら彼女は言った。

「私の最初の友達に、なつてはくれないか？」

実際は二年生になってからの、という文が頭に省略されているだろうが、それでも心臓目掛け一直線に突き刺さってくるかのような要求だった。

普段なら『だが断る』と冗談混じりに返すところだが、俺だって流石に場の空気くらいは読む。

「俺はもうとっくに友達だと思ってたがな」

口の端を歪めてそう言い放った。

「そうか、それは済まん。女には頭で分かっていると言ってももらいたい事というものがあってな」

彼女もまたにやりと笑みを浮かべる。

「『愛してる』、とか？」

「それもいずれ君の口から聞きたいものだ」

ははっ、と笑い合いながら共に並んで歩き出す。まあ多分にリップサービスの含まれた言葉であろうが、褒め言葉として素直に受け取

っつておっじい。

「ああ、ここだ。わざわざ送ってもらって済まなかったな」

「は？」

それから数分後、案外早く彼女の家に到着した。……というか。

「君の家は水子だったな。東に通っていたのならもう少しあちらの方だろう？ 遠回りさせて済まなかったな」

「……いや、別に遠回りじゃないというか、寧ろ俺の方こそ無駄な事に気遣いさせてごめんというか」

「？ 何がだ？」

すつと右手を上げ、一軒の家を指差す。ここから四件ほど先、せいぜい50mほどしか離れていない。

「あの家が何か？」

「俺の家」

「は？」

「……水子の端っこなんだよ、あそこ」

「……………」

新しい友達は、ご近所さんでした。

追記。

どうも異性の同級生と二人きりという慣れない状況に脳が沸いていたらしい。家に帰ってからようやく気付いたのだが、

「……………名前聞いて、N e e e e e ーッ！」

俺の馬鹿。

4・皇帝、同級生につき（後書き）

くだらだら書いてたら無駄に分量が。もう少しスマートにできそうです
ね、これ。

言語は交流に欠かせないツールであり、会話の内容は無論の事その
話し方も重要です。

「どのようなこと」を話すのかではなく「どのように」話すのかで
その人の性格が分かる、という言葉もあります。

でもまあ、第一印象だって大事だけれどその人がどんな人なのかは
深く付き合ってみない事には分からない訳で。雅彦にはこれから頑
張ってほしい所です。

つか、通算五話目にしてようやく主人公の名前が出たと思ったら今
度は別のメインキャラの名前が出せないでやんの。やーい、馬鹿
バーカ。

か、勘違いしないでよねっ！こここれは伏線であって別に書いた後
にふと気付いた訳じゃないんだからっ！

あ、ツンデレを描くのは大変そうなので多分出ません。出ても徹の
姉とかの話の筋に関係ない辺りで。

5・力、家族につき

「宛野さんちの隣？ ああ、北瀬さん。あんたと同年代の娘がいたわね。絢音ちゃんだったかしら、小学校一緒だったでしょ？」

母に聞いてみた所衝撃の事実が発覚。全く記憶に残っていないが、同じ小学校だったらしい。直ぐさま小学校の卒業アルバムを引っ張り出して確認してみた所、確かに『北瀬絢音』の文字の上に彼女の面影のある顔写真が載っていた。

子供の頃からあのような話し方だったという事だが、それなら少しは印象に残っていても良さそうなものである。六年間一度も同じクラスにならなかったのだろうか。

「……………ま、取りあえず風呂にでも入ろう」

名前も分かったことだし、小学校の事については明日話のネタにでもすればいい。

寝間着代わりのジャージを引っ張りだし、風呂場に向かう。

……………で、脱衣所のドアを空けたら下着姿の妹が髪を拭いていた。

目が合った。捕食者の如き鋭い視線が突き刺さる。つか、仕方ない

じゃん、音しなかったし。鍵閉めるよ。

無言で体重計を手に取り 少し考えて脱衣籠に変えた。うん、まだ少しは理性的な考えが働くようだ。ならばまだ交渉の余地は、

「Aか。これからの成長に期待しよう」

「死ねえっ！ この変態がア！」

あつても潰すのが俺クオリティ。容赦無く頭部を強打されて地面に突っ伏す。

そこへ更に降り注ぐストンピングの嵐。レフリー！レフリーはどこにいる！

「ははははは、強い子に育ってくれてお兄ちゃんは嬉しいよ。ああ、もっと、もっと痛みをくれっ！」

「こ、この異常性癖者め……！」

ストンピングは止んだが、今度は首の後ろを踏み付けられて身動きが取れない。っーか軽く命が危なくないかこの状況？

「だが妹よ、これはお前のミスであつて俺に非は無いのでは？ 鍵だつてちゃんと付いてるわけだし、というか兄妹で何を恥じるところがある」

「見られたことについては別にいいわ。ただ、自分の言動を振り返

「ってみなさい」

ぐりぐりぐりぐり。うわー超怖い。親父、里沙の育て方間違っただん
じゃないですか？

「なに、中学生ならまだ先があるさ。それに最近は貧乳の需要が増
大いたいたたたいた！ ちよっ、鳴った、今首の骨ゴキッて鳴っ
た！？」

「ならゴキリと鳴るのも遠くなさそうね」

うわ、声に温度が感じられないんですけどっ！

「ひ、久し振りのスキンシップでお兄ちゃん嬉しいけどちょっとこ
れは過激過ぎないかナー、なんて思うんだけどそこんどこどつよ」

「言つべき事を言つたら止めてあげるわよ、別に兄さんに対して殺
意が……うん、それほどあるわけでは」

「調子乗ってマジ済みませんでした。お風呂に入りとつございます
のでどうかお御足をお退け下さいませ」

「まあいいわ。次は無いと思いなさいよ」

里沙は呆れたようにそう言って、首筋から足を退けた。だが、甘い
な里沙。

「は。では詫びの印に私めの裸体を御照覧めされよ。ささっ、いざいざー！」

まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！

立ち上がった所ですかさずズボンのボタンを外し、勢いよく引き落とす！

あ、一緒にパンツも膝までいつちまった。まあいいか。

「ぬわーっ！ズボンを脱ぐなっ！近寄るな、なんだその手はっ！」

「ハムラビ法典宜しく、目には目を、裸体には裸体を。さあ、兄の肉体をとくと見るがいい！」

「んな夢に出そうなもの見たくもないっ！鏡の前でポーズでも取つてろっ！」

服を掴んでどたばたと下着姿で外に出ていく。家族しかいないとはいえそれはそれで思春期の娘の行動として問題があるとお兄ちゃんはどう思うよ？

「しっかし、いくつになっても可愛いなあ、里沙は」

彼氏とかいたらそいつと本気で殴り合いとかしてしまいそうだ。里沙が欲しければ俺を越えてみせる！とか言ってる。

実際にやったら彼氏の前に里沙が俺の息の根を止めそうな気がするが。

そんな妄想をしながらにやにやと笑みを浮かべて風呂場のノブを掴んだところで、

「 雅彦、ちょっと来なさい」

「……いえす、まむ」

パンツ一丁で正座したまま説教されました。
ええ、そうですね。俺ももう高校生だし、慎みを持つべきですよ。

「 どうだったよ、昨日のライブは」

「 良かったぜ！」

「 知性の程度がよく分かる返答をありがとう」

次の日の朝、学校側の駅で偶然会った亮二と自転車に乗りながら会

話を交わす。

駅にはうちの高校の専用駐輪場などというものがあり、多くの生徒がそれを利用してゐる。通学用のバスも出ているのだが、一通や交通制限等で使えるルートが限られているため、最短距離で来る事が出来る自転車と所用時間にあまり差が無いことと、駐輪場の利用代がバスの定期券と比べ大幅に安い事で利用者は半々といったところ。朝は中国の都市部かと突っ込みたくなるような光景が広がることになる。

「いや、もうマジ最高。たまんねーっス。泣けるよホント、マジ泣けた！」

「もういい、分かった、馬鹿が移るからもう黙れ」

こいつどうやってうちの高校入ったんだろう。裏でなんか工作でもしたんじゃないだろうな。

「やつば生はいいよなー。音が身体に当たってくるっつーか、録音にはない迫力があるっつーか。」

あ、色々グッズ買ってきたから後で見せてやるよ。温泉饅頭は流石に無かったけど、欲しいやつがあったらいくつかやってもいいぜ」

「ペナントとか無いか？」

「だから観光じゃねえっつーの！ つーかいらねえだろペナントなんか！」

「ほう、ならばそのバンドがもしグッズとしてペナントを出したとしても買わないんだな？」

「うっ！ ……か、買うな、多分」

そんな馬鹿な会話をしているうちに高校に到着。校門からは自転車を押して運ぶことになっているので、並んでカラカラと歩く。

「因みにマサの方はどうよ、昨日はなんかあったか？」

「あー、まあ色々とあったな。そうだ、お前北瀬って知ってるか？」

「北瀬？ ああ、あの子か。結構可愛いよな。いや、ありや綺麗だった方がいいのか。話したことはないけども、気になるよなー」

「なんだ、まだ手を出してないのか。亮二の事だからってつきり特攻して玉砕済みかと」

「俺は発情期の猿か。つか玉砕を前提にすんな。可愛い女の子が近くにいてからってすぐ飛び付きやいってもんでもねーだろ。」

そういうのは段階踏んでやるもんだ。タイミングを見計らってアプローチしなきゃ成功なんぞするわきゃねーだろ」

「おお、亮二の口から異性交遊についてのまともな意見が……」

「因みに俺の携帯には女の子のメルアドが108人まであるぞ」

「ついさっきの俺の感心を返しやがれ」

「いや、落とせるか分からないー人を相手に粘り強くやるよりは視

野を広く持つてだな」

何を言ったところで所詮亮二は亮二か。こいつも悪人じゃないんだが性格が三枚目だからな。

所定の場所にとめて鍵をかけ、籠から鞆を取り出そうとした所で、

「あつ！ 宮内先輩っ！」

背後から、声をかけられた。

「ん？」

部活をやってないので後輩に知り合いはいないはずだが、この場に宮内なんて名前が俺の他にいる可能性の方がよっぽど低いので多分俺のことだろう。何か聞き覚えのある声のような気もしたし、とりあえず振り返ってみる。

そこには、一年生である事を示す青い腕章を付けたショートカットの女の子がいた。つか、特徴としてはショートカットよりもむしろ、

「おいおい、小学生がなんでこんなところにいるんだ？ 迷子？ お母さんは一緒じゃないのか？」

「うわっ、一年振りなのにまたそれですかっ！」

ところでこいつを見てくれ。こいつをどう思うっ？

凄く……小さいです。

「うう、覚えていてくれたのは嬉しいですけど、扱いも変わらないんですねえ……」

吹けば飛んでしまいそうなその体は流石に一度見たら忘れられん。

「つか、ほんと小さいままだなお前。去年からどんだけ伸びた？」

「い、……2センチです」

「そうか、1センチか。……150センチにはまだまだ遠いな。」

「あと少しですっ！ まだ成長期だから大丈夫なんですっ！」

怒るとぶくつと頬を膨らませる癖もまだ残っているようだ。んなことしてるから子供に見えるんだというに。

「……おい、マサ。この子誰よ？」

亮二が不可解な目でこちらを見ている。この子呼ばわりしている事と目付きからしてどうやら亮二のストライクゾーンには入っていない模様。

「……意外だ。ロリから熟女まで完璧にカバーしているかと思っていたが」

「いきなり何の話だおい」

「いや、こちらの話。」

こいつは渡井純。中学んときの後輩だ」

「ふーん。……で？」

なんだこいつ。

「何だよその、で？ ってのは」

「仲よさ気じゃん。なんかあんだろ、他にもさ？」

「部活の後輩だったっつーだけだ。他にやましい事は無い」

何を勘繰っているのか知らんが、昔特に何かあったわけでも無い。普通の部活内での先輩後輩としての関係しか無かったぞ。

「えー？ そうか？ それにしちやーよー、」

「そつえば先輩、もうフルートはやってないんですか？」

「お前こそ、まだ法螺貝吹いてんのか？」

「法螺貝じゃなくてホルンですっ！ なんでそんなもの吹くんですか、調和も何もあったものじゃないですよー！」

「あ、おい、ちょっと？」

「元は角笛だろ？ 法螺貝と似たようなもんだろっが」

「なんでそうなりますかっ！ 全然違いますって！」

「ははは、そう怒るな。ほら、飴ちゃんあげよう」

「子供扱いするなあっ！」

「……………」

「あ、飴ないや。酢昆布でいいか？」

「いりませんよっ！ ってしかもコレ酢昆布じゃなくて酢漬けイカですし！」

「腹に入れば一緒だろ」

「いやいやいや、全然違いますから！ 共通点酢だけですし！」

「とうるかお前朝からうるさいぞ。子供じゃあるまいし、周りの迷惑とか考えるよ恥ずかしい」

「うっわ、そんなときだけ扱い変えますか！ 卑劣ですよ先輩！」

「で、どうした亮二。なんか用か？」

「てめえ分かってやってたんか！ どんだけ性根が腐ってやがる！」

「？」

「はっはっは、ほづら、飴ちゃんあげよう」

「これはたこぶえだー！ー！」

「先輩先輩！ それで先輩はどうなんですか、もう吹奏楽やらないんですか!?!？」

「そこの亮二でも誘えばどうだ？」

「たこぶえで吹奏楽部に入れるかー!!！」

「おい、そこの三人。ちょっと来なさい」

「」「ハイ」「」

騒いでいたら生活指導の先生に怒られました。

「自重してくださいよ先輩」

「元はといえば亮二のせいだろ」

「いや、どう考えてもお前しかいないだろうが」

「君達」

「
「
「
ハイ
」
」
」

5・力、家族につき（後書き）

分量が少なかったので新キャラ二人を同時に出したのですが、共通点が年下しかなかったのでサブタイトルはあえて別にしました。「力と　、年下につき」だと関係が見えにくいですし。

これからは新しい人物を出すのを少し控え目にして、既存のキャラを少し掘り下げておこうかと。

フルネームが出せてないのはあと二人……本文中で自然に人物紹介するうまい方法ってないですかね。

視点となるキャラを変えて「やあ、僕の名前は富竹。フリーのカメラマン！」とかで始めてもいいのかな？かな？

あ、たこぶえについて知らない人は画像検索してみることをお勧めします。なかなか衝撃的な画像が見られるかと。

6・節制、後輩につき

「先輩、いい加減教えて下さいよーっ！ 怒りますよっ！」

「お前もいい加減しつこいな。カリカリするなよ、毎日牛乳飲んでるか？ ……いや、そんなわけないか」

「胸か！ 今胸を見て言ったか！ 先輩の桃色思春期！」

いや、背丈だが……そつちにもコンプレックス持ってたのなお前。つか、どんな罵倒だそれ？

先生に軽く絞られた後、俺達は下駄箱まで歩いて来た……んだが、そんな騒いでるとまた捕まるぞおい。

「お前こそ、やっぱり吹奏楽目当てでここに来たのか？ お前ならもう少し上の学校でも十分狙えただろ」

「え？ ええまあ、そうですね。どうせならいいところで練習したいですし」

「ヘナチヨコな部活が多い中でなんか知らねえけど頭一つ飛び出してるもんな、ウチの吹奏楽って」

亮二の言う通り、俺達の通う私立城岡高校は一応進学校として知られており、その為かは知らないが部活に精を出す生徒が少ない。

運動部は大会に出ればどれもこれも一回戦負け、文化部に至ってはそもそも部員すら集まらずに半数が存続の危機に瀕している状況である。

そんな中で我らが誇る吹奏楽部は毎年全国大会などで輝かしい成績を残しており、この前にはなんとテレビが取材に来た。部員数はサッカー部と野球部とバスケット部を足してもまだ足りないほどだというから驚きである。

「吹奏楽はもうやってないよ。あんな化け物集団の中に突っ込んでいく度胸は俺には無い。竹槍でモビルスーツと戦うようなもんだ」
去年初めて演奏を聞いたとき、それが俺の吹いていたのと同じフルートだとは思えないような凄まじい迫力を感じたのを覚えている。それはまるで演奏者が木星に変化して俺を押し潰すかのようだった。

「でも私、先輩のフルートも結構好きでしたけど」

「フルート『も』って所がちよいと引つ掛かるがな」

目茶苦茶な絵を描いた小学生に図工の先生が『うん、そういうのも楽しそうでいいね』と言うようなものじゃないのかそれ。いや、なんか例えが変な気もするが。とりあえず俺、見下されてる？

「いや、でもやる気ないヤツにや結構きつついぜ、あの部活。肺活量つけるとかかって毎朝マラソンしてるし、運動部より動き回ってんじゃないか？」

「そうそう。しかもさぼったら放課後に二倍走れとか言ってる。馬車馬じゃあるまいし、そんなに走れるかって」

「んー、でも私ならそれでもやりたいですけどね。練習は厳しいかもしれませんが、それを乗り越えた際の快感！ というか」

「なあマサ、純ちゃんって実は強い敵に遭遇するとワクワクしちゃ
う戦闘民族だったりしないか？」

「はっはっは、亮二、遠慮はいらんからはっきり言っただけやね。
このマゾめ、と」

「亮二さんはそんな意味で言っただけじゃないよ！ あ、というかすみま
せん。亮二さんの苗字はなんとおっしゃるのでしょうか」

「おう、そういえば聞いたつきりで言っただけだったな。戯城だよ。
でも別に亮二さんでもいいよ？ むしろバッチコイ」

「いえ、遠慮しておきます」

「いやー、年上だからって気にすること無いよ？ 試しにさっきみ
たいに軽く言ってみなして、ほら」

「戯城さん。あらぬ誤解があつては困りますので」

「あ、うん。そうね」

おお、亮二が引いた。つか意外と言つた、こいつ。

亮二がしょぼくれていると、予鈴のチャイムが響く。いかん、もう
こんな時間か。

「ほれ、予鈴も鳴ったし行くぞ。純も遅れるなよ」

「あつ、ちよつと待ってください先輩」

「ん？」

まだ何かあるのだろうか。まさか放課後までに書いておいて下さい！とか言って白紙の入部届でも出すつもりじゃあるまいな。

「ほら、先輩って中学の頃ケータイ持ってなかったじゃないですか。それで、今持つてるなら番号教えてもらえませんか？」

「番号？ W52TAだけど」

「いや、機種番号じゃなくて！ 常識的に考えて電話番号に決まってるじゃないですか！」

「常識的に考えて冗談に決まってるだろ。そんなんだから背が伸びないんだ」

「関係無いですっ！」

「あ、じゃあ俺のも教えようか？」

「え、はい。じゃあついでに」

「……そうか。俺はマサのついでか。その程度でしかないのか……マサの番号が欲しいだけで俺はどうだって……」

「ちょっ、いや、違いますって！ 単なる言葉の綾ですよ！」

「何慌ててんだお前？ ほら、ケータイ出せ」

と、なにやら顔を赤くした純と番号を互いに交換し、一年の教室は一階というところで階段下で別れた。

「しかしマサ……ホントになんも無かったんか？」

「お前もしつこいな、純とはただの部活仲間、先輩後輩でしか無かつたって言うてるだろ」

「じゃあなんで下の名前なんだ？ 渡井、でいいじゃん」

「もう一人渡井ってのがいて、分かりにくいからそうしただけだ。つっても、もう一人の奴とは殆ど関わらなかつたけどな」

「それはどっちから？」

「？ どういう意味だ？」

「いや、どっちが先に下の名前で呼ぶように提案したのかな、と」

「それは」

三年ほど前の思い出が蘇る。

三年が引退してから少しした頃で、俺は純とよく一緒になって練習していた。

俺がフルートのパートを吹き、純が同じ曲のホルンのパートを合わせて吹く。

だが、俺はいつも同じ部分で間違えて、その度に純はまたですか先輩、と言ってはくすくすと笑った。

何回目かのミスの後、俺はちょっと待て、と言って一人でその部分を何度か確かめるように吹いて、それからまた少し戻った所から二人で演奏を再開する。

そして、やっぱり同じところで間違えた。

だああああ！　なんだこりゃ、ふざけんなっ！

あはは、もう一回やります？

当然だ、出来るまでやるぞ！　というわけで渡井、またこの部分……

あの、先輩

ん、疲れたか？　悪い、なら俺一人で練習してるから少し休んでくれ

いえ、そうじゃなくてですね。二年にも渡井先輩っているじゃないですか

おう、いるな。三年が引退してからぱったり来なくなったが。

どれ、今度軽くシメてくれようか……お前もやるか？

そういうことでも無くてですね！　それだと渡井って呼ぶと紛らわしいじゃないですか

そうか？　俺はあまり気にならないが

私が気になるんです。ですからその、良ければ私のことはこれから先……

純、って呼んでくれませんか？

「……… 忘れたよ、んな些細なこと」

「なんだよ、つまんねえな……… っておい、急になんだよ！」

「窓からベリちゃんが見えた！ 急がないとヤバイ！」

「マジか！ 今日はまだ随分と来んのが早えな！」

二段飛ばしで階段を駆け登りながらふと思う。あの時俺は、何と答えただろうか。

その事については、本当に忘れていた。

7・戦車、担任につき

時計の長針が8を指し、校内に電子音のチャイムが鳴り響く。月曜の朝からクラスにならんでいるのはどれもこれも暗い顔。中には先週の土曜よりもむしる疲れが溜まっているような表情を浮かべる奴すらいる。

……いや、その気持ちは分からんでもないが。

俺と亮二は教室に入る寸前で先を歩いていた担任に追い付き、そして共にドアをくぐった。

別に自分が来るまでに席に着いていないと遅刻にするような人ではないが、何となく後から教室に入るのは気が引ける。

いつもはチャイムが鳴って数分後くらいに来るのに、たまにこうしてまともな時間に来るから油断できない。

「総務、号令」

壇上から芯の通った力強い声で件の担任、しなぐら科倉が最前列の那佐に指示を出す。

すらりとした170cmと少しの上背に短くカットした髪を金に染め、耳には赤いピアス。

服装も男物のTシャツの上に体のラインがはつきり出る黒のライダース風、というのだろうか、そんなようなジャケットを羽織り、下はダメージのぼつちり入ったジーンズにスニーカーというとても教職に就く者とは思えない服装をしている。

おまけに軽く吊り気味の目尻とラフな口調、そして思ったことを遠

慮せずばと口に出すせいで第一印象までばつちりヤンキーな人だ。

20台、美人女教師、独身と話だけ聞けばあれだが、男子生徒諸君からはアイドル教師というよりは剛の者といった感じで恐れられている。

因みに一部で囁かれているベリちゃんという呼称は、実子と書いて『ベリこ』と読む、ヤンママ達の絶望的命名感覚の先駆けのような名前に由来する。

補足というか蛇足として昨年、体育祭の日に本人の目の前でそう呼んだ勇者がいたのだが、

……その時俺は、地面と平行に吹き飛ぶ人間を初めて目撃した。

科倉実子、容赦せん！

「起立」

静かな声で那佐が言うと、がたがたとそこから椅子のぶつかる音を立てて皆が立ち上がる。

因みに総務というのは他の学校で言う学級委員と同じ役割である。総務長というのは存在しないが。

礼、着席、と続けて号令を出した後は、そのままクラスが静まり返る。僅かにぼそぼそと話し声がするものの、他のクラスに比べればかなり大人しいものだろう。

「なんだ、早いもので四月もほぼ終わりだな。みなそろそろ新しいクラスにも馴染めたか？ 間違つて一年の頃のクラスに行ったりするのはいいかげんこつ恥ずかしいぞ」

というと、何人ががびくりと肩を動かし、また何人かは苦笑する。いや、俺もあまり笑えないけども。

……一度だけな、うん。

「勉強も大事だけど、楽しく日々を過ごすことは更に大切な事だ。特にこの二年生つーのは一番プレッシャーやストレスの掛からない気楽な時期だしな。皆、適度に手を抜いて楽ーに過ごすように」

それは確かにそうかもしれないが、教師が生徒の前で堂々と言うことでもないような……

「んじゃま挨拶はこの辺にしておいて、今日も恒例のテストな。今週は派手なニュースばかりだったから、今までのより簡単だろ」

そついうと持ってきた書類の束からプリントを取り出し、先頭の席に一つ分ずつてきぱきと配っていく。

毎週月曜の一時限目、ロングホームルームの時間に毎回科倉先生はテストと題して一枚のプリントを配る。

中身は10題の問題からなっており、内5題はニュースとしてテレビで流されている時事問題、4題はいわゆる一般知識や雑学、最後の1問は与えられた問題文に対する論述問題となっている。

採点は20点満点、単純計算では一問2点となるが、実際はそうで

はない。持ち点20から減点していく方式で計算しているので、ふざけたまともじゃない答えの場合3点でも4点でも引かれていく。

このようなテストをする理由は、『どうせろくに勉強しないのだから、せめてテレビのニュースくらいには関心を持って』、とのことである。

ちなみに亮二は初回に分からない問題に対してボケを書いていった結果、マイナス51点という凄まじい点数をたたき出した。

次回は半分近くを空欄で提出した結果、その失敗を恐れるしみつたれた根性が気に入らないとしてマイナス20点を付けられた。

結果、現在二連続で最下位のデイフェンディングチャンピオンである。友人として情けない限りだが。

「全員まわったか？ では、始め。時間は10分な」

ぱらぱらとプリントをひっくり返す音、次いでこつこつとシャーペーンが机を叩く音が連続する。

俺も遅れじとそれに合わせてペンを動かし、すらすらと解答欄を埋めていく。

前半の時事問題はともかく、後半の問題については単純な知識問題ではなくあくまで文をよく読んで頭を使えば答えが出るように作られている辺りに科倉の技量が伺える。外見と裏腹に、その内実は立派な教師と言える人なのである。

9問を特に引つ掛かる事なく埋め、10問目に取り掛かる。今回の内容は……

『今や一人一台携帯電話を持つ時代となり、子供から老人まで外出時には欠かさず持ち歩くようになっていく。』

携帯電話にはメールを始めとしカメラや各種アプリケーション、最近ではクレジットカードやテレビとしての機能を備えたものまで存在する。

では、この先技術が発達してどのような機能を持つ携帯電話が開発されるのか自分なりの考えを述べよ』

……うーむ、なかなか選択肢の幅の広い問題が来たな。やはり通信機能やメモリを活用したものになるのだろうか、はてさてどうするべきか。

テレビの次ということで映画配信か、それとも衛星を利用した宇宙からの映像受信、裏を搔いてゴーグル型の携帯電話というのもありか？

色々と案をプリントの片隅にメモしながら、黙々と考えを巡らせた。

「……よし、そこまで。一番後ろの列、回収してあたしのところまで持ってきてなさい」

袖を押さえて腕時計を見ながら、科倉が告げる。

問題の回収が始まると、教室にざわめきが戻ってくる。殆どは楽し

げな声だが、中にはひどく暗い顔をしたやつもいる。例えば窓際の席とかに。

今回は確かに分かりやすい問題ばかりだったのに、それでもお前は駄目なのか、亮二。

「よし、じゃああたしは採点してるから、その間に総務、これ読んどけ」

そう言つて科倉は那佐にクリアファイルを手渡し、そのまま教卓で採点を始める。

那佐は数枚の印刷物を取り出すと、少し文を目で追つてからクラスを振り返り、その内容を朗読し始める。

「本日の放課後に委員会を開くので、クラスの各委員は決められた集合場所へ速やかに移動し」

淡々と特にこれといった感情、恥じらいや責任感など、を見せずに那佐はその内容を口述していく。

去年ちらつと見たことがあるのだけれど、ああいうプリントって表に『教師用』とか『朝のHRで必ず連絡して下さい』とか書いてあるんだよな。……こうやって易々と生徒に渡していいものなのか？生徒に対する信頼とはまた別の話のような気がするが、この人の場合はそれで通つてしまいそうな気がするから不思議だ。

数枚のプリントを読むのが一枚につき10問ぼつちとはいえクラス全員分のプリントを採点するより時間がかかる筈もなく、必然その差分だけ時間の空白が生まれ、そしてまた必然的にそれは雑談に使われる事になる訳である。

内容は問わずもがな、先のテストのこととなる。分からなかった問題を教え合ったり、常識的な問題を間違えたやつをからかったりと楽しげな雰囲気である。

思えばこの時間で俺も今のクラスの何人かと打ち解けた訳で、そこまで読んでこのテストをしているのならやはり大したものだと思う。

そんな空気の中で俺も後ろの席の友人と話していると、ふと少し離れた席の一人と目が合った。

艶やかな長髪を青いリボンでポニーテールに纏め、筋の通った鼻筋とクールな印象を与えるすらりとした目元に漆黒の瞳。

昨日駅で出会った記憶の外のご近所さん、北瀬絢音である。近くの席の数人で話しているようだ。

片手を上げて挨拶すると、北瀬も遅れて同じように返事をし、それからその手をこちらに向けて指差し、『どうだった？』と言うようにして僅かに首を傾けた。

それに俺はにやりと笑って親指を突き立てることで返答し、今度はこちらから指さして問い掛ける。

すると北瀬はまた俺を指さす。どういふことかと考えていると、次はその指で自分をさした。

ますます意味が分からないので見ていると、最後に北瀬は胸の横辺りで掌を開いて天井に向け、それからぐっ、と持ち上げるような仕種をして不敵に笑う。

成る程、『俺より上の点だ』ということか。

……上等だ。後で吠え面かくなよ。

その瞬間、二人の間でひそかに対決の火花が散らされた。

「よし、終了。みな静粛に、結果を発表するぞー」

計ったようなタイミングで科倉が声をあげる。

クラスが僅かに静まり、皆が聞きの体勢に入った。採点結果はまずは個人に返却されずにこうして公表されるのだ。

「まず鮎川。前回12点から今回は13点。まあぼちぼちといった所だが、もう少しニュースを見る、2問丸々落としてるぞ。次、猪田は……」

各自に点数と共に一言付け加えつつ、結果をすらすらと述べていく。出席番号順なので、7番の亮二から北瀬、俺と続き、少し離れて13番に那佐が来ることになる。

「……梶、9点。微妙に答えの内容がずれてんな。もう少し意識的に記憶してみたらどうだ。で、次は」

採点したプリントの束を一枚めくり、名前を確認する。

「ざれしろか」

「『ざじょう』っすよ！ なんすかその悪意の籠った間違い!？」

「馬鹿の名前なんか一々正確に覚えてられるか。まともな点を取つてから文句を言え、ざれくろ」

「ひらがなレベルで読み間違え!？ もういいっすよ、それで何点

すか？」

「おお、喜べ。ようやく常識レベルの点数だぞ」

そう言っただけはにっこりと笑い、

「0点だ」

「異議ありいっつー！」

大爆笑に包まれたクラスの中で、亮二が一人必死に声を荒げる。

「裁判長、それはあまりに不当な採点であると思われます！」

「ほう……あたしの採点が不当と？」

ぎらりと刃物のような鋭い目が亮二を睨み付ける。うっ、と一瞬息を詰まらせるが、それでもなんとか反論の体勢をとる。

「い、いや、だって空欄は全部埋めたし、何問かは絶対合ってる自信ありますし、それにふざけて書いた解答も今回は無いっすよ！それで0点はちょっと」

「ふむ、ではこの10問目のも真面目に書いたのか？」

「もちろんっすー！」

「そうか……それはすまん。てっきりまた受け狙いで書いたものかと思ってな。それなら少し点をやらんでもないが……しかしこの解答は……」

と、何故か突然腕を組んで真剣に悩み始めた担任に、クラスが少しざわめき始める。

「あの、先生。一体何が……？」

おずおずと先頭の席に座っていた女子の一人が問い掛けると、科倉はこめかみをぼりぼりと指で掻き、

「いや、真剣に考えたのなら減点を押さえてもいいのだが……真剣に考えた結果がこれというのも問題があるし、どうしたものかと」

「へ？ 何が問題なんすか？」

「……お前なあ」

純粹に訳が分からないといった顔をした亮二を見て、ため息をつきながら告げる。

「全長１ミリの携帯なんて、どうやって使うんだ？」

正確には『技術が発達すると色々小型化するので、いずれはマイクロサイズの携帯が作られるかと思われ。』と書いたらしいが、それでも十分馬鹿な解答である。

思われ、って何だ。

「まあ仕方ない。馬鹿は罪じゃない、病気だ。病気を責める訳にはいかないし特別に5点にしてやろう。感謝しろよ、ざくれる」

「ついに無機物に！ しかも実際に劇中で出てこないどマイナーな機体っ!?!」

頭を抱えて天を仰ぐ馬鹿は置いておき、とにかく次は北瀬の番である。

ここまでで最高点は16点。果たして何点を取ったのだろうか。プリントが一枚めくられる。それに軽く目を走らせた後科倉は小さく頷き、

「北瀬、18点。全体的によく出来てるな。この調子なら問題無いだろう」

おお、と小さく歓声上がる。ここまでの最高点を更新してみせたか。

北瀬は周囲の席の人からの誉め言葉に謙遜しながらちらりとこちらを見て、どうだといわんばかりの顔をしてみせた。

「最後のはちよつとずれてる感じがするな。ラジオや外部メモリならもう色々な機種に実装されてるぞ。では次」

さて、俺の番である。正直自分ではかなりいい出来だと思っているのだが、果たしてどうだろうか。なんせ目標は18点である。最悪でも一つのミスしか許されない。

その結果は

「宮内も18点だな。最後はなかなか良かったが、時事問題を一問落としてる。だがまあ、十分良い点数だ」

引き分けか。

近くのやつにガッツポーズを取ってから、こちらを微妙な目で見ていた北瀬にグツと親指を突き立てる。

『ナイスフアイト』

苦笑して、北瀬も同じように指を立てた。

余談だが、那佐はあっさり20点をとってのけた。

これで3連続でクラス一位&満点である。きっとあいつにはメフィストフェレスでも憑いているに違いない。

7・戦車、担任につき（後書き）

いや、気温もすっかり下がって秋ですね。なんせ一月ぶりですものねー……

何やってたの？こんなになるまで……

なるべく早く投稿するって約束したじゃない。読者さんと。

罪なので罰として携帯のアンテナをもぐ。

うるせー。（ガッシ！ ボカツ！）

スイーツ（笑）

とまあ小芝居はこの辺にしておき、随分長いこと間が開いてしまいました。

この一月で携帯での連載に少し限界を感じたりもしました。時間がかかるので書き始めのテンションを最後まで維持するのが難しいんですよねえ……

この先数話分の構想は既にあるのですが、実際に文として書き下ろすのはいつになるやら……いや、なるべく頑張らせて頂きます。

あと、皆さんって後書きについてどうお考えなのでしょうか。私なんかはあると嬉しい位に思っているのですが、中にはあまり頻繁にあるとうざい、とか感じている人もいるのだろうかと考えると控えたほうがいいのかと懸念したり。

後書きも楽しめるように作っているのですが、なかなか難しいもので。某電撃の作家みたいに無茶な工夫でも凝らしてみようかしら。

8・会話、通話、意志表示

「よし、それじゃ授業はここまで。今週も元気よく過ごすように」

そんな小学校の朝の会のような台詞と5分ほどの授業時間を残し、科倉先生は教室を後にした。

全員の点数を読み上げた後は、その他の配布物を配るだけの簡単なHRとなった。

この時期はまだ定期テストも先であり、新しいクラスにも馴染み始めた頃なので学校での日常には何の懸念もなく、のほほんとした空気が校内に漂っている。

他の学校なら部活の仮入部の期間もそろそろ終わり、新人集めのラストパートといった感じで二、三年の体育会系はギラギラと目を光らせている頃なのかもしれないが、うちに限ってはそんなことはない。

なんせ、一年と二年の入部率に倍近い開きがある学校であるからして。

そんな春の陽気にあてられたような気分で漫然と欠伸などをしていくと、こちらへと歩いてくる北瀬が視界の端に捉えられた。

「よ、旧人類」

「デジタルデバイドは恥じるべき事ではないさ。ほら、昨日の電車賃だ」

そう言うと北瀬は机の上に数枚の硬貨を積む。

ちやりちやりと片手で数えてみたらきつちりと10円単位で揃えら

れていた。律義なやつ。

「ところで、財布はどうなった？ 何か分かったことはあったのか」

「ああ。どうやら部活の練習試合で向かった先の高校で落としたりしい。朝、相手先から顧問に電話が掛かってきたらしい」

「部活ねえ。それで昨日は制服だったのか」

「まあそうだ。例に漏れず弱小のハンド部だが、それはそれで楽しくやっているよ」

「ちなみに結果は？」

「ダブルスコアは阻止した」

「……さいですか」

謙遜とかじゃなくマジで弱小らしい。ハンドボールには詳しくないが、そんなに点差が開くスポーツだったか？

「ん？ でも、それなら部活仲間とかは一緒にいなかったのか？ あの時一人きりだったよな」

「ああ、それは……帰り道の途中で少し用事があったな。その時に他の皆とは別れたんだ」

「用事つーと、どんな？」

「え？」

何とは無しに聞いてみたのだが北瀬は急にうるたえだし、歯切れ悪く答える。

「あー……そう、ちょっと買い物」

「買い物って、財布忘れたんじゃないの？」

「いや、そうなんだが。あー、なんだな……」

と、一人で勝手に悩みだす。何か言い難い話なのだろうか。

すらりと細く整った眉を八の字に歪め、10秒ほど考えた末に北瀬が出した答えは、

「そんなことはどうだっていいだろう」

「……さいですね」

無理矢理はぐらかされました。

まあ言いたくないなら別にそれでいいのだが、なんかちょっとその言い方が胸にグサリといますか。

そんな事を話していると、後ろから近づいて来た那佐が無言で先程のテストを差し出してきた。

プリントの返却も総務の仕事。名前の響きだけは恰好良いが、やっていることはただの雑用である。

「しかし、また那佐だけ満点か。ちょっと見せてくれるか？」

自分の答案を見直しながら那佐に話し掛ける。

那佐はちよつと待て、と言って残りのプリントを配り終えた後、自

分のプリントを持って戻って来た。

「どれ……ふむ……成る程」

達筆な文字で記された答案に目を通していく。新聞のコラムのように整った文。この一割ほどの知性が亮二にあれば……いや、言うまい。

「ほう、そういう考え方があったか。しかし、携帯のサイズでそんな機能を実現できるのか……？」

北瀬も俺の肩越しにその答案を見る。

「北瀬は携帯持ってないんだったよな」

「ああ。パソコンなら一応持っているのだが、それも使いこなせているとは到底言えんな」

「今時携帯を持っていないのか、珍しいな」

と、那佐が会話に割り込む。これまた珍しいが、北瀬が携帯を持っていないことに驚いたのだろうか。

「いや、那佐。お前も今時珍しい部類に入ると思うが」

「俺は携帯なら持っているぞ」

「ツーカー時代の携帯を今でも使ってるやつなどそうはおらん」

「まだ使えるぞ？」

「そういう問題じゃねえ」

通話の際にアンテナを立てる必要があるとか、もはや過去の遺産レベルじゃないか？

「ところで北瀬、パソコンのメール機能くらいは使えるよな？」

「大丈夫だ。というより、ネットとメールしか使えん」

「勿体なっ……いやまあ、それじゃアドレス教えるから、暇な時にもメールしてくれ。あ、それと那佐。プリントあんがとな」

「構わない」

那佐にプリントを返し、机の中からルーズリーフを一枚引っ張り出し携帯のメモアドを書いて北瀬に渡す。

「ん、それじゃ家に帰ったら送らせてもらっよ」

「おう、まあ気軽にメールしてくれ」

と、席に戻る那佐の後ろ姿を見て、ふと一つの疑問が浮かんで来た。

「なあ、北瀬。ところでさっき那佐……陣堂が来た時なんだが、良かったのか？」

「良かったというと、何がだ？」

「いや、ほら……その話し方。気にしてるんじゃないのか？」

那佐はああいうやつだし別に気にしていないようだったが、またうっかりしていたのだろうか。

そう思ったのだが、北瀬はああ、と軽く頷くと、

「考えたが、学校ではこのままの話し方で行こうと思う」

と、澄ました表情のまま告げた。

「……いいのか？ 他の奴らの前で口調を変えても俺は別に気にしないが」

「いや、いいんだ。それに、私の方が気にしないようにしたんだ」

そう言うと北瀬は軽くその口元に笑みを咲かせ、

「このクラスとはこれから先一年もの間付き合っていくことになるんだ。言葉の与える第一印象なんて長く付き合っていけば変わっていくもの、そう考えることにしたよ。」

今まで付き合っただ来た人たちには多少混乱させるかもしれないが、まあその辺はなんとかなるだろう。女の猫被りなんて日常茶飯事だしな

「……男にはそれが何より恐ろしいんだがな」

「まあ、いつの世も男女というのは騙し騙される関係にあるということだ」

「お前一体いくつだよ」

青春の真っ只中を駆け抜けている若者の台詞とは思えん。

しかしまあ、この考えの前向きな変化の原因が昨日の俺との会話なのだとしたら。

少し嬉しい、かもな。

8・会話、通話、意志表示（後書き）

短編を二本ほど書き上げて、作品数が計四本になりました。これで携帯で見ると「同一作者の他の作品」の部分がきっちり埋まるようになりました。やったね

真面目に話をしましょう。（愚痴っぽくなるので、そういうのが嫌な方はお戻り下さい）

短編を書いていたのは以前から気にしていた「短く簡潔に、かつ書きたいことを全て書く」ということを練習するためです。

一作目は読了時間10分超で軽く失敗しましたが、二作目は5分少々に分量を収めることに成功。

ですが、内容的には前者の方がしっかきしているように思えます。つまり分量と共に中身まで薄くなってしまったようで……

いい文章を書くにはまだまだ努力が必要です。内容も似たようなコメディールになってしまいましたし。

さて、残る挑戦すべき問題は更新間隔か。

うん、それ無理。(おい

……がんばりますとも。

9・ファンクラブ、拡大中？

創立してから30数年とまあそれなりに歴史がないでもないうちの高校だが、中には創立当初から勤め続けている年配の教師なども存在する。

その大ベテランとでもいうべき教師の授業は流石に長年の経験と培ってきた知識により非常に分かりやすく、懇切丁寧なものである。それは確かに真面目に聞けば問題に取り組むのに実に有用なテクニクなどが自然と身につくのだらう。だが悲しいことに我々若者は今の一瞬を生きる刹那的な生き物であり、己を高めることより現在の益を求めるものなのである。

要するに、静かな教室内で淡々と奏でられる落ち着いたバリトンボイスは良い子守歌にしかならず、そうして寝たり書いたり消したり寝たりしながら時は経ち、あっという間に昼休み。

……何と言うか、我ながら自堕落な学校生活を送っているものだ。

「どうだったよ徹、昨日のライブは。楽しかったか？」

「うん、楽しかったよ。凄くたくさん人がいて疲れちゃったけど」

友人同士でテーブルを囲み、各々食事を口に運びながら取るに足らない雑談に興じる。うーむ、これぞまさしく学校生活。訳の分からん勉強なんぞ糞喰らえ……とまでは言わないが。面白くはないがそれはそれで大切ですとも。

「特にパフォーマンズとかをしてる訳じゃないんだけどボーカルの顔がいいからな、女の子のファンが結構多いんだよ」

「というより半数以上が女性だな。前はそうでもなかったんだが最近になって一気に増えた」

天津飯をレンゲ代わりにスプーンで掬いながら亮二は語る。

「始めは純粹に曲に惚れ込んだファンが大半だったんだけどな。女の子の口コミでボーカルがかっこいいバンドとして広まって、それで一気に人気が出たんだよ。」

俺は初期のファンだったから名前が売れたのは嬉しかったけど、その理由が曲以外の所にあるってのは複雑だよなあ」

「流行は女が作って女が広めるものだしな、仕方ないだろ」

弁当をつつきながら話を合わせると、那佐がそれに続いた。

「だが本人たちはそれをあまり気にしていないようだし、それを受けて安易に路線を変更したりもしていない。周囲は変わっても彼らの曲は変わらない、それでいいんじゃないか」

「うーむ……ま、それもそうか」

「因みに、リョーは何の曲が好きなの？」

桃色の箸をちょこちょこ動かしながら徹。

「オレ？ そだなー、『暁』とか『空を舞った少年』かな。新曲の『Stigma』も悪くないけど、やっぱり勢いのあるやつがい

いな」

「暁って、ライブの時最初に歌ったあれ？ あの曲かっこいいよね」

「おつ、分かるか徹！ 暁はいつもライブの始めに歌う曲でな、ポールのメイヤが子供の頃に見た初日の出に感動したその時の思いを詩にして……」

「暁もいいが『Dear beast』もいいぞ。あのイントロのギターのアルペジオは単純ながら深い響きがあるし、サビの部分も……」

と、亮二と那佐は曲についての蘊蓄をぺらぺらと話し出した。徹はそれに対して相槌を打ったり質問したりしているが、ライブに行かず曲を聞いてもない俺にはさっぱり分からん。

しかし、亮二はともかく那佐がここまで積極的に話すのは久しぶりだな。余程好きなバンドなのだろう。

延々と続くコアな話に辟易してちらりと他所を向く。と、食事の受け渡しの所に来た集団からはい出てくるちみっこい姿が目に入った。

セーラー服姿のそれはきよるきよると食堂内を見渡す いや、あの身長では『見渡す』というか『見回す』のが精一杯のような気もするが。

だがこの辺りの時間になると、食堂ホールの半分と壁に沿って並んでいる長テーブルの個人席はほとんど埋まってしまい、6人掛けの円卓テーブルは俺達のようなグループが独占してしまっている状態になる。割り込めない訳ではないが、それは相当気まずい。体験した俺が言うのだから間違いない。

料理の載った盆を持ったまま困ったように右往左往する小さな姿と、その視線がこちらを向いてぴたと止まった。

……困惑に潜められた眉とくりくりした小動物のような円い瞳が、ようやく居場所を見つけたといわんばかりにぱつと輝いた。

とりあえず、関係ないとばかりに目を逸らして会話に戻ってみた。

「先輩の薄情者ーっ!!」

すると、とててつと走ってきたながら小動物はそんなことを言う。

「知らん、外の芝生にピクニックシートでも敷いてそこで食べ」

「小学校の遠足ですか!？」

一人じゃ虚しいだろうがな。

「マサ、その子誰? 下級生に知り合いなんていたの?」

徹がきよとんとした顔で俺に聞いてくる。まあ、俺は部活に入っていないから後輩との関係なんて想像出来ないだろうな。

「おっ、今朝の。ツールとナサは知らないよな。この子は……」

と、朝の一件で面識のある亮二が二人に紹介しようとしたところで、

「渡井か、うちの高校に来ていたとは知らなかったな」

「あ、陣堂さん！　どうもお久しぶりです」

純是那佐にぺこりと頭を下げ、亮二は『わた……』と言った所で固まった。

「徹、こいつは渡井。俺とマサが通っていた中学の後輩…….」
「でも俺はあまり関わっていなかったが」

「へー、そうなんだ。僕は楢木、宜しくね渡井さん」

「はい、宜しくお願ひします」

「……なるほどな」

そして紹介終了。亮二、お前は何も悪くない。気にするな。

「この時間だと席が残ってないかな？　よければ一緒に食べる？」

「すみません、お願ひします。いつもは混む前に来るんですけど、今日は授業が長引いちゃって…….」

純は俺の隣にカレーの載ったトレイを置くと、よいしょと声を掛けながら椅子に座る。

「うちのカレーに甘口なんてあったか？　給食のより辛いぞ、水汲んできてやるうか」

「どこまで子供扱いますか！ お願いします！」

どっちだよ。

しかしまあ自分から言い出した事なので大人しく水を汲みに行く俺ってば紳士。……突っ込みはいらん。

出入口の横の冷水機からコップに水を汲み、ついでにそのまた隣にある自販機で自分の飲み物を買う。

50円玉を入れボタンを押して待つこと10秒。紙コップに入った氷ぎつしりのレモンスカッシュを取り出して席に戻る。

「おお！ 『crazy moonlight』の良さが分かるとは、やるね純ちゃん！」

「渡井です。でも、あの破滅的な歌詞はやっぱり嫌いな人が多いですよね」

「他の曲とは大きく方向性が違うからな。だがその詩の中に潜む生々しい人間性が俺は好きだ」

戻ってみれば純はすっかり打ち解けていて、今度は徹が頭の上に疑問符を浮かべて黙っていた。

「俺のいない間に何が……」

取りあえず純の前に水を置いて椅子に座る。

「どうも、先輩。いや昨日vectorのライブに行ったという話だったので、それについて話を」

「……ファンなのか？」

「人気が出る前から追ってました。最近はにわかが増えてちょっとあれですけど」

「さよか。それは知らなかった」

意外な共通点だな。しかしそれならこの二人と話が盛り上がるのも分かる。

「まさか渡井がV e c t o rを知っていたとはな。そうと知っていたらチケットをやったんだが」

「えっ？ 余ってたんですか？」

「そこで冷凍食品と晩飯の残りの入った安い弁当をかつ喰らってる男に寸前で予定が入ってたなあー」

「だからお前は俺の母親に喧嘩売ってんのかと」

「そんな勿体ない！ それなら私に連絡下さいよ先輩！」

「いや知らんがな」

何をそんなむきになる。大体お前の趣味なんぞ俺は初耳だったぞ。

「そうだ、昨日色々グッズを買ったんだけど欲しいのがあったらあげよっか？」

「ホントですか！？ それじゃ遠慮なくいただきます」

「え、俺にくれるんじゃないの？」

「野郎にくれてやる慈悲はねえ」

友情とはかくも脆い物が……！

なんて無駄に衝撃を受けていると、左の方からぼそりと小さな声で

「……ねえ、僕にも分かるような話を……」

……あ、すまん徹。すっかり忘れてた。

9・ファンクラブ、拡大中？（後書き）

ざわ……ざわ……

（一月一回の更新にすら失敗……っ！）

（恥知らず……今頃になってどの面下げて……っ！）

（この作者……っ！ もう、駄目……っ！）

ざわ……ざわ……

というわけで9話です（どういう訳だ）

取りあえず連載に一つオチつけたし話のプロットも出来てるから書いてみるかー、なんて軽い気持ちで打ってたら驚愕の速さで一話完成。

真面目な話書いてたからそのリバウンドだろうか……

これからもこんな感じの更新になりそうですが、放置だけはしないつもりですので温かく見守っていただけないでしょうか。

あなたの一言が作者を動かす！ 以上、怠惰でした。

10・雑談雑議、オンザステーション

私立城岡高等学校。偏差値ぼちぼち、生徒数それなり、進学先まあまあ。特徴は全国クラスの吹奏楽部。最寄り駅より徒歩15分、専用駐輪場・通学バス有り。

まあ詰まる所、一点を除けば日本各地にいくらでもある中堅校というわけであり、そしてその一点に関わりの無い俺にとっては普通の高校となんら変わり無い。

それじゃなんで俺がわざわざそんなところを受けたのかといえば、そりゃまあ近いからだ。エアコンもあるし。動機なんてそんなもんで十分だろ。

んでもって俺はそんなやる気の無い学生であるから当然部活動などにも所属しておらず、授業が終われば定時で直帰のお気楽生活である。

というわけで今日も今日とて春の陽気の下チャリを転がし駅への道をひた走る。

因みに徹は部活で那佐はバス通学、亮二は悪友同士集まって麻雀や格ゲーを持ち込み下校時間ギリギリまでポンチーあそれロン、メインタンピンドラ3。シッショー！ なわけで、一緒に仲良く楽しい下校とはいかない。決してハブにされて一人寂しく帰らざるを得ない訳ではないのだ。……誰に言い訳してんだ、俺？

駐輪場の所定の位置に止めて鍵を掛け、前カゴから鞆を引き抜く。まだ買ってから一年なのだが既に一部が大きく凹み、鞆の容積に僅かに足りないため時折このように軽く嵌まる。

ぱらぱらと後に続いて駐輪場に入ってくる輩を横目で見つつ、鞆を肩にかけてその隣を抜けていく。と、

「お？」

「やあ」

ポニーテールを風に靡^{なび}かせながら北瀬がそこを通った。向かう先は同じだろうということだ。駐輪場の外、出口の脇でしばらく待っていると、左手に鞆を下げた北瀬がふらりと出て来た。

「お前、部活は？」

「昨日は練習試合だったから今日は休息日だ。というかそっちこそ部活は無いのか？」

二人並んで駅まで歩く。と言っても1分と掛からず到着する距離だが。

「勉強に専念する為に部活は遠慮させて貰っています」

「今日の数学の授業中、気持ち良さそうに寝ていたのは誰だったかね」

「いやはや、見られてたか。肩をすくめて軽く笑うと、全く、と北瀬は呆れたように話す。

「うちは無能な教師も結構な数いるが、天藤の話は聞いて損はないぞ。あの人の授業はしっかりしている」

「無能というと、小菅とか？」

「あいつは教科書の内容を馬鹿正直にやってるだけだな。一人で辞書を引きながらやってるほうがまだ頭に入る、時間ばかり掛かる役に立たない授業だ」

なんか随分辛辣な事をずばずば言っつな。何か高等教育に関して思うところでもあるんだろうか。

「とりあえず、北瀬はこのまま帰るのか……っつてああ、定期を忘れてたんだっけ」

「ん、途中で降りて今日中に取りに行こうと思っている。君は真っ直ぐ帰るのか？」

俺はそれにひょいひょいと片手を振り、否定を表す。

「いんや。俺も今日はバイトだから、同じ駅で降りることになるな」

「バイトか……どこでしているんだ？」

「そうだな、口で言っても分かりにくいかもしれんが……」

と、そんな雑談をしながら北瀬は購入した切符、俺は定期を使って改札を抜けて構内で電車を待つ。

「輸入雑貨ねえ……何だか高級そつな感じもするが」

「そんなこともないぞ。女の子向けの小物やアクセサリとか、中には外国産のアホグッズもある」

「アホグッズ？ 鼻眼鏡とか馬マスクとかそんな感じか？」

「そうそう。音に反応して立ち上がろうと足を震わせる生まれたてのバンビとか、吸い込むと叫び声がブルース・リーになるガスとか」

「……それは単なるヘリウムガスじゃないか？」

他様々な海外産パーティーグッズについて熱弁を奮っていると、構内にアナウンスが流れて電車が到着した。

「しかし、それは輸入雑貨という分類に入れて問題無いのか？」

「いやー、でもうちの店ってホント何でも有りな品揃えだし。火星の土地権利書とかあってもおかしくない位の力オスつぶりだからな」

空気の抜けるような音を立てて開いた扉をくぐり一歩足を車内に踏み入れた所で、目の前右側の席になにか茶色い物を発見。

派手な私服に身を包んだそれはこちらに向かって満面の笑みを浮かべながら片手をひらひらと振り、そして

「やつほーマサっち、昨日は世話になったわね。……あら、隣の子は誰？ もしかして3人目？ 若いわねえ」

そんな台詞を吐いた。

「んーと、言いたいことは色々ありますが。取りあえず黙りやがれこのニート」

「分かり切った事実を言ったところで何のダメージにもならないわよ?」

こいつ……自覚しておいて何の引け目も感じてねえ!?
とまあ普段のアホなやり取りをしていると、隣から声が掛けられた。

「宮内、この女性は? あと3人目とはどういう意味だ」

「取りあえずそこには何の意味も無いと言っておこう。んで、この人は」

バイト先の同僚、と言おうとしたところで頼子さんが言葉を被せ、

「マサつちの愛人1号、赤岳頼子よん。マサつち、昨日は世話になったわね」

何故二度言うか。しかもそのタイミングで。

そして北瀬、何故そんな目で俺を見る。そして一歩引いたのはどういう訳だ。

「……さて」

「北瀬、そいつの言うことを真に受けるな。全部でたらめだぞ」

「まあ、確かに私とマサつちの関係は愛人じゃなくてセフ」

「はいOK分かった黙れ!」

その先は冗談でも言っってはならん!

「宮内、君が一度に何人の女性に手を出しているのか知らないが、私に近付いたのがそういう目的からだったのなら今後の付き合い方を少し考えさせてもらおう……」

「いや、別に俺は彼女とかそういうのは、」

「私の時もそうだったわよねえ。優しい言葉で近付いて来て、少し気を許した所で急に……あの夜のマサっち、激しかった」

そんな事を言いながら頼子さんはほう、とアンニユイなため息を吐く……っておい！

「勝手に過去と思い出を捏造するんじゃないやねえ！ ええい頬に手を置くな、遠い目をするなっ！」

「取りあえず宮内、思春期の性の暴走は男子なら誰にでもあることかもしれない。だが、少しはそれを抑える努力をしてみてはどうだ？ 今の君は盛りのついた猿と同じだぞ」

「あああああ、もうそんなんじゃないやなくてだなあ！」

このまま流れに身を任せていると收拾が付かなくなりそうだ、一
気にけりをつける！

「こちら赤岳頼子、バイト先の同僚で脳みそピンクの駄目人間！
そちら北瀬絢音、高校のクラスメイト！ はい今後とも宜しく！」

「いや、想像は付いていたがな。君に女を囲う甲斐性と度胸がある
とは思えん」

「見れば分かるわよ。制服着てるし」

「ちつくしよー！ー！ー！」

『閉まるドアにご注意下さい。ドア、閉まりまーす』

ぶしゅー、がたん。

10・雑談雑議、オンザステーション（後書き）

ジャンルがコメディ寄りになってきている気がします。そして恋愛要素が毛ほどもありません。

大丈夫か、この小説……？

次話に続きます、多分。

11・雑談雑議、オンザトレイン

「ごとごとと音を立てながら徐々に加速する電車の中、座敷に端から頼子さん、俺、北瀬の順に三人並んで座る。しかしこの人、なんでもここにいろのやら。」

「あらあら両手に花」

「片方は茶色く枯れかけてますがね」

「そんな事言うなら試してみる？」

何をだ。……いや、言わなくていい。突っ込みには疲れた。

それにしても共通の話題が思い付かん。話の切り出し方に困りしばらく黙っていると、まず北瀬が口を開いた。

「世話になったと言ってましたが、昨日何かあったのですか？」

ああ、そういえば俺もそれについて詳しく聞いてなかったな。頼子さんはその言葉にいやそれが困ったことにねえ、と前置きして、「ちょっと別件で面倒が起きてそれを処理しなくちゃならなくなっただけ、その日にバイトが入ってたのよ。それで私の代わりにマサっちに出してもらったワケ」

「そうですか。その件はもう片付いたのですか？」

「いやあ、それがすっぱかされちゃって。仕方ないからこれから改

めて顔出しに行くのよ。あ、それと年上だからって無理に敬語使わなくていいわよ」

「いえ、あまり気安く話すのも気が引けますしこの位で」

「つか、何があったんです？ 客に手を出したとか？」

「手を上げたの言い間違いか？」

俺の発言にすかさず北瀬が訂正を加える。しかし悪いが。

「いや、間違ってたないぞ」

冗談でもこの人ならやりかねん。頼子さんは平気な顔でまさか、と否定しつつ相変わらずの軽い口調で話す。

「男なら誰でも手を出す訳じゃないわよ。ましてやバイト中かつ初対面の他人にはね」

「そうでしたっけ？」

「信用無いわねえ」

そりゃ、顔合わせる度に猥談紛いの事を吐かれれば。……と、北瀬の表情がぴくりと動いた。

「しかし別件って、一体どれくらいバイト行ってるんです？」

「んーと、週6？」

「もう就職しろよ」

なんだその無駄な勤労っぷり。キャラと違わないか？

「就職なんてサービス残業だの上司のご機嫌取りだの面倒ばかりじゃない。バイトの方が気楽でいいわ」

「相変わらず将来性の無い意見ですね。そんなんで年取ってからはどうする気ですか」

「両親の年金を……」

「やめい！ その歳で親に寄り掛かるな！」

「じゃあマサつちに」

「抱き着くな！」

横から抱き着いてくる頼子さんを必死に引きはがしていると、背後から北瀬に声を掛けられた。

「宮内はいつごろからバイトを始めたんだ？」

「ん？ 高校入って少ししてからだな。夏休み前に金が欲しくなっ
て始めたのが今も続いてるって感じか」

「あの頃のマサつちはつぶで可愛かったわねえ」

ようやく諦めた頼子さんが席に座り直しながら懐かしむように言
う。

「何かあるごとに赤岳さん赤岳さん〜って私を頼ってきてねえ。ちよつとからかうだけで顔を真つ赤にして恥ずかしがってたのも面白かったわ。それが今では……」

「こんな変態に」

「違う！」

さらつと人を変態呼ばわりするな！

「冗談だ。しかし、随分と仲が良さそうだが、実際あれだ、一時期付き合ったりとかしてなかったのか？」

「……またえらく目が輝いてるな、北瀬」

なんつーかもう見るからに興味津々といった感じのニヤニヤとした笑いを浮かべている。実はコイバナとか大好物か？

「気のせいだろ。で、どうなんだ？ 赤岳さんの言ったような事が実はあつたりとか」

「いやん」

「じつちゃんの名に懸けて断じて無い！」

また変なりアクションをした頼子さんに被せて否定する。

「第一俺の好みに年上と髪を染めた女性は含まれてない」

「成る程、黒髪フェチか」

「……北瀬、なんか別の言い方は無いのか？」

確かに間違っではないが、フェチとか言う物凄くアブノーマルな性癖に聞こえるだろ。

すると年上であり尚且つ髪をブラウンに染めていて俺の好みからばっちり外れていることになる頼子さんは、あら初耳、と驚いたように声を上げる。

「染髪した女性が嫌だなんてまた随分と感性が古いわね」

「いいでしょう別に、俺の好みの問題なんですから」

「見た目と年齢で人を判断しちゃ駄目よ？ お姉さんが矯正してあげようかしら」

「頼子さんについては見た目と中身が同一だということはよく分かっていますから結構です」

「因みに黒髪のどこがいいんだ？ というか、単に髪を染めるのが嫌なだけか？」

「あー、そうだな……」

その質問に少し考え込む。生れつきの金髪とか茶髪についてはなら抵抗は無いわけだし、ということとはということか。

「艶のある黒髪が好きだという単なる好みの問題もあるけど、それ以上に髪を染めるという行為が嫌だな。周りの流行に合わせて自分

なりの個性を捨てててみたいでさ」

「周りに流されやすいのも個性と言えなくも無いが」

「そりゃそうだけでも。だから単にそういうのが個人的に気に入らないだけだよ。説得力も何もない、我が儘みたいなものだ」

「まあ、詰まるところ」

頼子さんはそこで口を開き、俺の意見を簡潔に一言で纏める。

「頼子さんが幼女キラのマサつちを墜とす為には黒髪のアジアンビューティーにならなくてはならない、と」

「惜しい、それじゃ0点だ」

「記述式でオールオアナッシングの採点とは珍しい」

そこに突っ込まれても反応出来んぞ北瀬。どうせなら幼女キラの方に突っ込んで欲しかった。

「因みの因みその北瀬ちゃんも黒髪だけれども、マサつち的にはどうなのよ。萌え〜？」

「ああ、萌え〜だな」

「そうか、萌え〜か。ところで宮内、電車に撥ねられると四肢と首が吹っ飛ばらしいな」

「はっはっは、それは怖い。今度から通学時には背後に気をつける

としよう」

そんな毒にも薬にもならない馬鹿話に興じていると、

『間もなく、扇谷、扇谷。お出口は右側です』

「おや、もう着くな」

車内アナウンスが目的の駅の名前を告げ、ゆっくりと減速を始める。

「私は西口だが、二人はどちらに？」

「俺は東だ」

「私は西ね。それじゃ、マサッチとはここでお別れかしら」

ぐぐつと体が傾ぐような感覚を残して電車は止まり、薄い金属製のドアがスライドして開く。

「それじゃ、また明日」

「おう、またな」

「今度は二人きりで……ね？」

「さっさと行け」

軽く手を振って去った北瀬と手を握って意味ありげな視線を投げかけて来た頼子さんを背後にバイト先へと歩き出す。

しかし、頼子さんの服装は思いっきり私服だったんだが……それで大丈夫なのだろうか。

「まあ、頼子さんならクビになった所で屁とも思わないだろうけどな」

鞆の紐を肩にかけ直し、これからの退屈な店番を前に一つ欠伸をした。

11・雑談雑議、オンザトレイン（後書き）

あれ、公共施設には定冠詞がいらなんだっけ……？ まあいいや、その辺は脳内で軽く突っ込んで置いてくださいませ。正確性よりテンポ重視です。

会話重視の話にしてみました、久しぶりに出した頼子が動かない動かない。そのくせにぺちやくちや口が回るので話が全然進まなくて軽く焦りました。

これが今作初の女性同士の会話なのですが、なんの色気もなく終了……うーむ、これでいいのか？

12・新人教育、必要ですか？

大通りを歩くこと数分、やや人込みが薄くなってきた辺りで一本裏に入った所にある寂れた背の低いビル。

その一階部分を賃借し、書かれた字が読めない程に黒ずんだ木製の看板を出してひっそりと骨董や輸入雑貨を販売している小さな店が俺のバイト先である。

店名のイシュタールとはどっかの神話か何かに出て来る豊饒を司る神の名前らしいが、店の外見は豊饒どころか苔すら根を張るのを諦めそうなほど。

築何年か突っ込むのも恐ろしいような老朽化した入口に、磨いても曇りが晴れない硝子窓。そして店先に並べられた何をモチーフにしたのか分からない彫刻や石像の群が胡散臭さを倍増させる。

その奇妙なモノリスの間をすり抜けて店内に入れば、そこに広がるのは更なる混沌。和洋中米東西南北貴賤清濁老若男女一切を問わず手当たり次第に集められた役に立つのか立たないのかそもそも何に使うのかすら予想もつかない物品が所狭しと並べられている。

「……………って、なんか昨日より増えてないか？」

入口の横に目を向けると、そこには大量の段ボールが積みまわっていた。半分ほどは口を開いて虚ろな中身を覗かせているが、残りはまだ『何か』を腹一杯に詰め込んでいるようだ。

(……………誰か作業してるのか？)

店主の老夫婦は注文はしても陳列や搬入などはまずしない。ましてや、これだけ大量の品物となれば俺のようなバイトに全ての作業

を丸投げしてしまう。

実際、入口に立つ俺の左手側、レジの更に奥にある私室と化した空間からは陰気なアナウンサーの声と共に年配特有のテンポによるゆったりとした会話がちらほらと聞こえてくる。

と、そこで店の奥から商品のブラインドを掻き分けてひよこつと一人の男の子が現れた。

「……………おおう」

従業員用のエプロンを付けたその姿を見て、思わずそんな声を上げる。ちよつと失礼かもしれないとは思ったが、仕方ないだろ。出て来たそれがあまりにも予想外の外見だったのだから。

身長は160とそこそこといったところだろう。すらりとした細身のジーンズに、労働で汗をかいたのか、上着を脱いで黒いロングのTシャツの袖を捲り上げ、その上から店名が胸元に入った空色のエプロンを付けている。

そこまではごく普通であるが、注目すべき点はそれを土台にして据えられた頭部。

陽の光に透かしたかのような金色の髪に、明るい翡翠色の瞳。ピント切れるような目とスツと延びた鼻筋の中に僅かな丸みを残した、幼さと美しさを混然とさせた中性的な顔立ち。

要するに欧州系の貴族を彷彿とさせる美少年、それがこの天地創造以前の世界もかくやという濼みに満ちたこの店の奥から突然現れたのだ。

「あ、んつと、君は……………？」

その少年に話し掛ける。すると、異国の風貌を持つその男の子はにっこりと微笑みを浮かべて。

「お、いらっしやせえー」

なんか変に砕けた口調で挨拶してきた。

「わりい、今商品並べてつから、慌ただしくしてつけど」

外見に相応しく透き通った声である為に、余計にその奇妙な喋りが強調されてしまう。

「……いや、俺は客じゃなくてバイトだが」

「おっと、そうなん？ わりい、入ったばっかなもんで」

「最近になって2人入ったとは聞いてたけどね。まさか今日出くわすとは」

「僕も昨日んなって急に呼ばれちって。暇だったから別にいいんだけどよお」

ニコニコと愛想よい笑顔を浮かべながら、そんなヤンキー風の口調で話す。……ホント、何処で習ったんだろうかその日本語。

「まあとりあえず。俺は宮内雅彦、マサとでも呼んでくれ」

「おう、マサさん。僕はリル・バレルっーんだ。イギリス、から来

た」

イギリスだけ一音ずつゆっくりと発音する。流暢に国名を言っても聞き取れないと思われたのだろうか。

「それで、今は何をしてたんだ？ 商品の陳列か？」

「ん、半分は倉庫に入れとくよう言われたんだけどよ、重くて運べねーから残りのを並べてたんだわ」

言われて傍に積まれた箱をよく見れば、僅かに大きさの違う二種類があるようだった。リルはその大きい方を広げて中身を並べていたらしい。

「そうか、先にやらせてて悪かったな。俺もすぐ用意するから」

そう言っつて、従業員室　と言っつても単にテーブルや流し等の些細な諸々があるだけの小さな部屋だが　に向かい、荷物を置いてエプロンと軍手を付ける。

「つか、今度は一体何買ったんだあの2人は」

指先が僅かに余った軍手をぐいぐいと直しながら面倒そうに口にする。まあろくなもんじゃないだろうことは大方予想は付くが。

「何と言っつか……色々？」

「……ま、取りあえず何の足しにもならなさそうなもんばっかだな」

段ボールの中を覗けば、手足が78本はあろうかという謎の動物

をモチーフにした像やQの形をした笛のようなものなどがごろごろしている。

「……まあいいや。とりあえず、こっちの小さい方を運んじまうか」

「合点承知」

……多分回転寿司で覚えたのかな、それ。

「んじゃいくか。せーのっ」

「ふんっ！」

腕を広げた程度の幅の段ボールを左右から持ち上げる。が、

「お、重っ……!!」

「何だこれ、ちよっ、一回降ろそう!!」

その予想以上の重さに、ぴきりと腕に痛みが走り、慌てて一度床に下ろす。

「一体何入ってんだこれ？ 中身をばらして運んだ方がいいんじゃないか？」

「あ、そりゃ駄目だ。店長は中を見ないようにしつつあったからよ」

「はあ？ 一体そりゃまたどうして……」

「あと、もし落としたりしたら口を塞いで急いで逃げるとか、具合

が悪くなったらすぐに報告しろとか」

「……………」

ふと、ABC兵器という単語が浮かんだ俺は考えすぎだろうか。

「……………深く考えずに、大人しく運ぼうか」

「……………そいつがいいな」

……………仕入先が気になるな。伝票とかついてないし。運送会社じゃなくて運び屋とかが関わってそんな感じ？

12・新人教育、必要ですか？（後書き）

「おとうさん、どうしてサンタさんの服は赤いの？」

「それはね、^{コミュニズム}共産主義の豚共の返り血を沢山浴びたからだよ」

「おとうさん、どうしてサンタさんの服は赤いの？」

「それはね、人間は網膜に入る光の波長の長さによって色を決定し信号に変化して脳がそれを認識するんだけどサンタさんの着ている服はその反射する光の波長が可視領域の中でもかなり長い部分に位置するのでそれが人間の脳の認識するところの赤という色に当て嵌まるから赤い色に見えるんだよところで色の認識といえバクオリアという問題があるんだけどそれは自分の見ているこの赤色と他の人の見ている赤色ははたして同じ色なのかもしれないから自分が緑だと思っっている色を他の人は赤だと思っっているんじゃない」

「おとうさん、どうしてサンタさんの服は赤いの？」

「ググレ」

時事ネタで申し訳ない。ちなみに幼い頃作者が両親に聞いた所、そ

の解答は「赤が好きだからだよ」「でした。
サントさんって意外と情熱的？

13・新人教育、必要ですね？

「お、終わった……っ！」

「腕が……腕がもげるかと……」

暗黒物質でも詰まってるのかと疑いたくなるような物凄い重量の段ボールを二階の倉庫へと運び終え、腹の底から息を吐き出す。

「さて、後は残った細かいのを並べりゃ作業終了……だけど、その前にちよつと休むか」

「……異議なし。指が震えちまってるわ」

どす、と運んで来た荷に背を預けて座り込んだリルは、自分の手を見て苦笑しながらそう言った。つられて自分の指を見ると、俺も小刻みにプルプルと震えていた。うわっ、気付かんかった。

「毎回こんな荷物ばっか来んのか？ そうだったら身が持ちそうにねえんだけどよ」

「いや、そんなことない。仕入れは月に数回しかないし、中身も大概は小物だから」

時たま等身大の石像やらが運ばれて来るが、それは流石に店頭で受け渡しじゃなくて業者がきつちり倉庫まで運んでくれるし。

「マサさんはこのバイト結構長いのか？」

指を組んでぐにぐにと揉み動かしながら、リルは質問を口にした。

「んー、まだ1年そこそこだな。赤岳さんには会った？ あの人は俺より長く働いてるみたいだけど」

「……あの人はちょっと、近寄りたくねえなあ」

赤岳という名前に、リルは引き攣った笑いを浮かべてたらりと汗を垂らす。

「自己紹介した瞬間に抱き着いてくるわ頭を撫でてくるわ膝の上に座らせようとするわ……僕はペットか？ 日本人は慎み深い民族じゃなかったのか？」

「あれはちょっとばかりブツ飛んだ一例だからあまり気にするな」

俺の時も方向性は違うけど似たような感じだったなあ……。

「ところで、リルは日本に来てから長いのか？ 日本語も結構使えてるみたいだし」

「いや、まだ1ヶ月ほどだな。言葉は向こうで色々と教わったんだけど、なんか変か？」

「……間違っではないけど、独特ではあるな。教師の顔が見てみたい」

「そいつも日本語は現地で学んだわけじゃねえらしいから、問題の根源ってわけじゃねえけどな。わりいが我慢してくれ、今から直す

のも大変だし」

人形職人の手で丁寧に整えられたかのような美貌を苦笑いにし、申し訳なさそうに謝る。

このギャップに慣れるには大分かかりそうだなあ……。北瀬のそれとは違って違和感バリバリだもん。

「日本には親の仕事か何かで来たのか？ 留学って訳でもないだろうし、近くに家族とでも住んでるのか？」

「いや、なんつーか親はいないんで……。出稼ぎみたいなもんかね？」

「いないって……。亡くなったのか？」

「いや、僕孤児なんすわ。別に気にしてないからいいですけどね。両親にもなんかしら棄てる理由があったんだろうし」

飄々と、不自然なまでに顔色一つ変えることなく淡々とした口調でリルはそう言い放った。

「……………そりゃ、悪いこと聞いたな」

「いや、ホント気にしてないんで大丈夫です。それで、義務教育も終わったんで院の子供たちのためにも働かねえと、と思って、院長のツテを頼って日本に来たわけよ」

「つーことは、今15歳か？」

「いや、16歳。しかしあれだ、日本のコーコーセイってのはどいつもこいつもちんまいな。学校で一番小さかった僕と大して変わら

ないんじゃないか？」

「欧州のガチムキヒョロヒョロとずんぐりむっくりのアジア民族を比べんな。どうせ日本人は短足胴長だよ」

そのお陰で重心ががっしりするので柔道などのスポーツでは有利であるという話もあるが、外見は機能美よりも形式美を優先して欲しかったものだ。DNAのいたずらか。

「あと、黒髪が多いと聞いてたのに茶髪が結構いたのには驚いたな。特に女性なんか半分近くそうじゃん？」

「なんだ、お前黒い髪が好きなのか？」

「好きっていうか、珍しいからな。イギリスには黒髪ってあまりいなかったからよ。なんでわざわざ染めんのかわかんねえな」

「ッその通りだ！」

「うおっ!?!」

突如叫びと共に立ち上がった俺に驚いたのか、リルはびくつと体を震わせると眼を見開いてこちらを見上げている。

「最近の女はやれオシャレだやれ流行だと言っては様々な色に髪を染める！俺はそんな奴らに言いたい、色素がすっかり抜け落ちた老婆でもあるまいし、何故せつかくの美しい黒髪をわざわざ別の色に染めてしまうのか、と！」

「は、はあ」

呆然とするリルを尻目に、俺は一人で更に過熱していく。

「昔から大和撫子といえど『烏の濡れ羽色をした艶やかな黒髪』の持ち主であると決まってる。それがなんだ、今では茶髪がカワイイだの金髪がイケてるだの黒髪は地味でダサいだの！ 貴様らは馬鹿かと！ おまけに髪を染めてる奴に決まって髪が傷んで困るだの言いやがって、薬を使ってるんだから当たり前だろうが！ 髪を染めるなんて文化がどうやって生まれたのか知らんが、俺はそんな文化は駆逐され撲滅され抹殺されてしかるべきであると思ってる！

歳を重ねて白髪が混じるようになってきたら見苦しくないよう染め直すというのはいまあ許そう。いや、見苦しいという考えも本来は唾棄すべきものではあるが、化粧の一部のようなものとして許容できないこともない。だが、健康な黒髪があるのにそれを脱色しあまつさえ不自然な着色を施すなどという暴挙は決して見逃すわけにはいかんのだ！ そもそも欧米人の顔立ちならともかく日本人の顔にあのような色を乗せたところで似合うはずもないだろう！ 日本人なら！ 黙って！ 黒ッ！！ そう思うだろ、アンタもッ！！」

「は、はいっ！」

ぐっと拳を握り締めながら息も荒くりルに目を向けると、リルは小さく縮こまりながらガクガクと首を縦に振った。

「金髪のアメリカ人、茶髪フランス人、赤毛のオランダ人は別に構わん！ だが、日本人はダメだ、日本人は何時でも何処でも何人であろうとも黒髪であるべきだッ！」

「あ、あのー、赤岳さんは……」

「あれは言ったところでこちらが喰われるだけだ。俺だって命と貞操をこんなところで散らしたくはない」

「あー……なんか分かるような」

それだけ言うと俺は目を閉じて一つ深呼吸をし、………ゆっくりと瞼を上げる。

「さて、んじゃそろそろ下の荷物の整理でも始めるか。どうせ客もろくに来ないだろうし、適当な所に並べときゃいいだろ」

「お、押忍。お供します」

「うむ、我について参れ」

その後、階段を降りている間に背後から「この店にまともな人はいないのか……？」と小さく呟く声が響いたとか、響かなかったとか。

13・新人教育、必要ですね？（後書き）

いや、別に私は黒髪フェチだとかそういう訳じゃ……ほ、ホントだよ（涙目で）

えーと、我ながらキモい。
連載三つを同時進行とか馬鹿じゃない？ という感じですが、なんとかやっていけたらなあ。一個放置気味なのは気にしない。

あと、アメリカでは身長170cm用の服がSサイズとして売られてるって話を聞いたことがあるのですが……それってマジなのかなあ……？

「ちつちつちつおっぱい　　ほいんほいーい　いぎゃあ　ああ
アアアッー！」

「兄さん、自殺願望があったのならもつと早く言ってくれば良かったのに。全力で手伝ってあげるわよ」

いきなりだが現在俺は10cm以上の身長差をものともせずにか
まされた見事な延髄切りを受けて倒れ、更に追撃のジャンピングニ
ードロップを背骨にクリーンヒットさせられた所である。

バイト帰りの兄の出迎えにしては随分と手荒いねマイシスター！

「いやー、友人がカラオケで熱唱していた歌をなんとなく口ずさん
でいただけなんだが、何か内容について気になる点でもあったのか
い？　んん？」

「鼻をへし折るわよ」

「ごめんなさい」

新しいDVの形が今ここに。

「とにかく、もうすぐ食事だから着替えて手でも洗ってくれば？」

「おう。ちなみに今日のおかずは？」

「鍋」

「……冬は一月以上前に終わったよな？」

「私に言わないでよ、母さんが決めただから」

嫌いじゃないけどさ。季節的にどうなんだろうね、これは。

親戚から何故か送られたとかいう魚介類が大量に入った鍋を皆でつつき、風呂で一日の汚れをさっぱり落としてさて勉強……などで無論なく、ハンター生活でもエンジョイするかとゲームに手を伸ばした所で携帯に一通のメールが届いた。

「む……登録されてないな」

そういえば朝学校で北瀬に教えたっけか。そんな事を思いつつメールを開くと、まず目に入って来たのが

『件名：恋する乙女は胸にこけしを抱く』

……絶対にこれは北瀬じゃねえ。つか、本文読む前に誰だか既に予想がつくんだが。

微妙に警戒しながらも本文に眼を通すと、その内容は……まあ、どっちかといえば普通。

『絢音ちゃんだと期待した？ しちゃったりした？ もう、マサッチったらスケベなんだから

ちなみにアドレスはあの後絢音ちゃんから聞き出したから。第一今まで知らなかった事自体が変な訳だし、別にいいわよね？』

何が変わって、何がいいのだろうか。さっぱり分からなかったが、取りあえず『どちら様でしょうか。アドレスを間違えていませんか？』とだけ返して様子を見ることにした。

赤岳さんのアドレスを登録すると、それから間を置かず再び登録外の所からのメールが届く。

『件名：北瀬です』

タイピングは苦手なので返信が遅れるかもしれないが大目に見てほしい。

それと赤岳さんにせがまれたので君のアドレスを教えてくださいましたが大丈夫だろうか。もし迷惑だったのなら済まない』

頼まれた、じゃなくてせがまれたと来たか。……一体どんな聞き方したんだろうな、あの入。

アドレスの登録後、『大丈夫だ。それより財布は無事回収できたのか』と返信して携帯を閉じ、引っ張り出したゲームの電源を入れる。

クレジットが流れ、タイトルが表示される前に再び携帯に着信。ゲームをする暇が無え。

誰かと思えば今度は純からのメールだった。そういえばこいつにも教えたっけな。

内容は今日の学校での出来事や吹奏楽部の練習の事など。……そんなことを報告されてもどう反応すればいいのやら。

『すごいねー純ちゃん頑張ったんだねー偉いねーちっちゃいねー』と打ち込んで送信。しかし数秒の間を置いて再び着信、『子供扱いするなー！』とだけ書かれたメールが届いた。

『お前の日常を報告されても俺にはどうすりゃいいか分からん。ど

うせなら小学校の帰りに黒の組織に捕まって口封じに新薬を飲まされたらそれからさっぱり背が伸びなくなった事件の顛末でも話してくれ』

『私にそんな過去はありません！というか先輩、今何やってるんですか？』

凄え勢いで話題を変えやがったなおい。

『特に何をしてるわけでもないが、ゲームしようと思った所に色々メールが届いてな。その返信で手一杯だ』

と、そんな文面を打っている間にも新たに一通届いたので、取りあえず送信した後でそちらにも目を通す。

『ああ、幸いな事に中身も全て無事だった。着替えに使った部屋の真ん中に落ちていたそうなのだが、何故その時に誰も気付かなかつたのだろうな』

「ふうむ」

『皆疲れてたんじゃないか？それか暗くてよく見えなかったとか。とにかく無事に戻ったのなら何よりだ』

それからふと思いつき、最後に文を足す。

『そういえば、帰りはともかく行きに顔を合わせることとか全然無いけど、一体何時に家出てんだ？』

携帯を置いて、記録されたゲームデータをロードする。ロード画面から切り替わる前に再びの着信。手慣れたのか、純からの返信

は結構早い。

『大変ならメール送るの止めときましようか？ぶっちゃけゲームする位なら相手してほしいですけど』

『はっはっは、このあまえんぼさんめ。もう9時だからおねむだろ、歯磨いて寝やがれ。つかお前の方こそ何してるんだ？』

『私は一昔前の小学生ですか！12時までなら余裕ですよ！それでああ、私は映画見てます。8チャンネルです』

それに目を通す暇もなく、続けてメールが届いた。

『私はいつも始業の一時半前に家を出ているが、君はもっと遅いよな？ 始業前ギリギリに来る事も多いし、もう少し早起したらどうだ』

ゲーム画面を見ればとくにロードは終了しており、活発に動き回る村人たちの中で鎧を身に纏った操作キャラが一人ぼつねんと立ち尽くしている。

『12時ってお前、そんなんじゃ徹夜も出来ないだろうが。それよりお前、メール打ちながら映画に集中できんのか？』

続けて返信画面を開き、かちかちと打ち込んでいく。ああ忙しい、無駄に。

『一時半前って、大分早くないか？朝練にしては遅いだろうが、その間何してるんだ？』

キャラを動かして酒場まで移動すると、レートを確認してからクエストを物色して条件の良いものを選択する。

受注して村を後にすると再びロード画面に切り替わり、そしてメー
ールが届く。

『先輩と違って徹夜する必要のない生活を送ってるから大丈夫です
！映画もアクション物なので、少しくらい見逃しても平気です』
『さやか。俺のゲームはアクション出来ずに立ち尽くすばかりだが
な』

送信からすぐに着信音が響いた。純ではありえないし、北瀬にし
てもこれまでのペースに比べるとかなり早い。取りあえず開いてみ
れば、添付された画像と共に一言

『では、これは貴方ではないのですね？』

「……………」

何を……何を送ったんだ赤岳頼子ツ！？

言い知れぬ悪い予感を覚えつつ、添付画像にカーソルを合わせて
決定ボタンを押す。

無限とも思える時間の後にディスプレイに表示されたその画像は、
先月春休みの間に赤岳さんに連れられて行った居酒屋で酔っ払った
俺が隣の部屋で行われていた合コンの中へ突入し、さらに服を次々
と脱いでいったその最終段階の写メ。

『何をするだアー！消せ、早くその画像データを消しやがれ！』

『私に無駄な手間を掛けさせた罰よ。なんなら絢音ちゃんにも同じ
ものを送ろうかしら？』

『小賢しい真似をした私が悪うございました。それだけはどうかお
許し下さい』

そんなんが広まったらマジで男女関係なく俺の交遊関係に亀裂が走りかねん。

送信された画像をどう処理するか悩んでいると、同時に3通のメールが届いた。

『朝は教室で勉強している。いつも私より先に陣堂君がいて、一人で本を読んでいるのだが。授業間の休みにも彼は本を読んでいるし、一体どれだけの本を持っているのだろうか？』

あと、赤岳さんから君の面白い画像があるという話を持ち掛けられたんだがどうすればいい？』

『私ゲームってあまりやらないんですよね。良かったら何か面白そうなの貸してもらえませんか？PSか64で』

『取りあえずばらまかれなくなければ今度付き合いなさい。今週の土曜でいいわよね？ 拒否権は無いから覚悟するように』

「……えーと、どれから突っ込めばいいのやら」

3人と同時にメールで雑談なんぞしたことないから頭の中がこんがらがってきた。出来ることなら背中に金属製の腕を持ち3丁の十字架型兵器ニッシャーを操る第二の人格にチェンジしてしまいたい。あ、携帯は一個だから無駄か。

……おっと、そういえば一人あてになりそうな奴がいた。

ちやかちやかと携帯を操作し、短文を送信する。

『今ヒマか？』

すると送信とほぼ同時という有り得ない速度でメールが返ってきた。

『今14人とメールしてて忙しい。邪魔すんな』

って俺の5倍かよ。なんつーやつだ。しかし奴の脳は下半身についてるといふ俺の仮説に信憑性が出てきたな。

『そのコツを教えてください。俺にはメールの才が乏しいらしく非常に困っている』

普段は無駄な才能としか思えないそれも今はどこか物凄い稀有な能力のようにも感じられるから不思議なものだ。……現金な奴と言われようと知ったことではない。

うむ、少なくとも今だけは頼りにしてるぞ、亮二。

14・雑談雑議、オンエア（後書き）

えーと、これを読んで誰が喜ぶのか謎な話になっちゃいました。

ただまあ思い付いた事をだらだらと綴るだけだったので目茶苦茶書きやすかったです。これを段ボール執筆法と言います（異物を混入して量を増やす的な意味で）（勿論嘘ですので絶対に使用しないように）

私は並行メールは最高5人まで経験がありますが、結構頭がパニックになりますよね。

「あれ？ どうしてこんな話になったんだっけ？」と前のメールを見直したら新しいメールが届いたり、急いで返信したら訳の分からない顔文字を使っていたり。

取りあえずメールでの雑談は大変なので皆さんPCのチャットを利用してみてもどうでしょうか、というオチでここは一つ。

15・夢はゆめ、現はうつ

暗い……というより、もはや視覚がすっぱりと欠落したかのような感覚。

自分がどこにいるのか、立っているのか寝ているのか、暑いのか寒いのか、それすらも分からない。そして嗅覚もまた一切働くことなく、外界の情報は九割以上が遮断されている。

唯一働く聴覚もどこかぼんやりとしていて、誰かが話しているのは分かってもその人数や内容までは把握することができない。

通常、何の前触れもなくこのような状況下に放り出されれば

『通常』ならまず有り得ない状況ではあるがまあ、そう仮定して

、あまりの訳の分からなさに混乱するものなのであるが、俺はといえば何故か冷静にこの状況を受け止めていた。

身動きも取れず五感も限りなく制限されているというのに、『これはそういうものなんだろう』と何の疑問も抱かずに甘受していたのである。

……世界………大………うす………

だが………、………直………はまだ………

男もいれば女もいる。興奮した若々しい声の持ち主の発言に、落ち着いた渋い声が被さる。何か議論をしているのか。

と、掠れた音声の中に突如はつきりとした声が響いた。

なんだかんだ言ったところで結局のところ、世界の壁の崩壊はもう止めることはできないと、そういうことでしょうか？

驚いた。

その突飛な内容もそうだが、その発言者の声に聞き覚えがあったからだ。

いや、発言者というのもおかしいか。なんせ、その声は

「おい」

!?

「聞いてんだろ 宮内、雅彦」

「 つつ!!」

びく、と身を震わせて目を開いた。視界に飛び込んで来たのは無明の闇ではなく、見慣れた天井とやや黄ばんだカーテン。

心臓は早鐘を打ち、額には汗が粒のように浮かんでいた。掛け布団は大きくずれて今にも床に落ちそうで、羽毛の詰まった枕は頭部の重みでぺったりと固く押し潰されている。

「あ、夢……か？」

呟いてみてから不思議な感覚を覚えた。夢……今のが、そうなのか？

「夢、夢………夢、ねえ………」

肺の底に溜まった嫌な空気を吐き出し、額の汗を掌で拭き取る。と、掌も汗でしっとり濡れていたことに気付いて、改めて枕元のティッシュで拭う。

小学生の頃から使い続けている無骨な時計に目をやれば、普段の起床時間より僅かに早い。とはいえ眠気もばっちり吹き飛んでしまったし二度寝する気分ではない。

某栄養剤のCMのように必死にベッドへしがみつくと布団を容赦なく蹴落とし、さらにそれを踏みにじって立ち上がる。

目やにのついた眼を擦りながらクローゼットを開き、黒一色の見栄えしないありきたりな学生服を取り出す。うむ、いつ見てもつまらんものだなこいつは。

「しっかし、まあ………」

寝間着代わりのジャージを脱ぎ、取り出したアンダーやYシャツに袖を通しながらぼそりと呟く。

「生まれて初めて見た夢の内容が電波つてのはなあ」

「とまあ、内容は忘れたが妙ちくりんな夢を見た訳よ」

一時限目の後の休み、那佐と亮二にその話をする、二人は何か変なものを見るかのような目つきでこちらを眺めた。

「その内容はともかくとして、今まで夢を見たことが無かったというのが信じられないな。ただ覚えてないというだけではないか？」

「いや、マジで見た事ない。小学生の頃、夜にホラー映画を見たときも寝るまではガクブルしてたが気付いたら朝になってたりしたし」

因みに一緒に観ていた里沙はその夜ばつちり怖い夢を見て布団に大きな地図を……いや、何でもない。聞かなかつた事にしてくれ。

「でも何でそんな夢見たんよ。フロイト先生に診断してもらったらどうなるんかね？」

「夢診断ねえ。なんか恐ろしい結果が出そうだから聞きたくねえな」

五感欠落に異世界だぜ？ 『現実に絶望し、全てから逃げ出して殻に籠っていたいと心の奥では思っているのでしょうか』とか言われたらシヨックにも程がある。

「でもまあ、夢なんて大概は出鱈目なもんだろ。女の子にモテモテになったり気を操って空飛んでみたり腕がドリルになったり」

「前二つはともかく、腕をドリルにしてどうすんだよ」

「馬つ鹿お前、ドリルは男の浪漫だろ。墓穴掘つても掘り抜けて、突き抜けたなら俺の勝ち！」

「誰に勝つたんだそれは」

「因みに空を飛ぶ夢は、実は海の中を泳ぐ夢であるという説があるらしい。まあ生物学的にくだの母胎の中でくだのという論拠が色々あるが、真偽の程は定かじゃないな」

「はあ」

相変わらず淡々と雑学、というかもはやマニアックな話を提供する那佐。一体どこでそういう知識を仕入れてくるのやら。

「夢かー。夢といえば、昔はよくライオンに追い掛けられる夢を見たなー」

「なんだそりゃ」

そして相変わらずしたり顔でアホな話題を提供する亮二。一体どうしてそんな三文の値打ちすらない経験ばかりしているのやら。

「いや、ガキの頃よく親に連れられて動物園に行っただけだよ。それで一番気に入ったのがライオンだったんだよ。強いシタテガミがカツコイイと思ってな」

実際のところ、百獣の王ライオンはハイエナから獲物を横取りすることもあるんだぜ、と言ってやるうかとも思ったが、子供の頃の亮二に突っ込みを入れても無駄か。

「そんで、あまりに好きすぎたもんで夢にまで見た訳よ。一緒にサッカーしたりただじゃれあったりだとか」

おお、正に子供の発想。それはほほえましい話じゃないか。

「でもってある日、テレビを見たらアフリカの野性動物のドキュメンタリー番組がやってたんだよ。二番目に好きな動物だったシマウマが群を作って移動している場面だった。まだ生まれたばかりの子供が多くて、大人たちが頑張って外敵から守るうとしているわけだ。……そこに、ライオンが現れた。」

逃げ惑い散り散りになる群、そして真っ先に狙われる子供のシマウマたち。倒れても必死に抵抗するんだけど、その間に次々と他のライオンが集まって来て……

次のシーンには骨と皮だけになった元シマウマと、『弱肉強食、これもまた自然の摂理です』という無機的なナレーションが流れてな。……その日から、ライオンの出る夢は全て悪夢に変わった」

「……………」

「あの系統の番組はたまにえぐい構成をするからな。運がなかったのだろう」

どこか遠い眼をする亮二に、飽くまであっさりとしたコメントをする那佐。

確かに、主観をシマウマでなくライオンに置いていけば手頃な獲

物がいてラッキー、という事になったのだろうか……現実には厳しい。

「印象的な夢といえば、俺もいくつか思い付くのがあんな」

「那佐も夢を見るのか。内容は電気羊か？」

「何意味分かんねえ事言っただマサ。なんだよ電気羊って」

それなりに決まったと思われたポケがアホの亮二によって潰された。お前ちよつとそこの窓からダイブしてこい。

「俺も人間だからな、夢くらい見る。意味の分からないものも結構あつたが。」

ガンジーとジョン・レノンが戦場で『NO MORE WAR!』と叫びながら竹槍で戦闘機を次々と撃墜してたり、池田屋に踏み込んだ新撰組がしばらくして出て来た時には全員黒人ラッパーになっていたり、ローマ法王が全宇宙の支配者でそれを倒すためにレッサーパンダの風太君が立ち上がったたり」

「……本当に、俺にはお前の考えてることが分からんよ」

つか、風太君とかナツいな。今の今まですっかり忘れてたぞ。

呆れた調子で言う俺に、那佐は無機質な声色で語る。

「要するに、夢の内容など一々気にする程価値のあるものではないということだ。変な夢を見たらこつやって話題の一つにでもすればいいだけのことだ。どこぞの宗教でもあるまいし、夢に見たことが真実になるわけでもない」

なんつーか世界中に敵を生み出しそうな発言だが、確かにその通りか。

「ところで亮二。次の数学の問題ちゃんと解いてあるか？ 今日当たるぞ、お前」

「うえ、マジ!? そうだったっけ」

「休み時間も残り一分か。ちなみにノートを貸す気はないぞ、ばれるからな」

「くっ……ならば、マサ!」

「お前の後俺じゃん。貸したら俺が困る、自力で乗り越えろ」

「うわーやっべー! 等と叫びながら席へ戻る亮二を見送り、時間もあれなので俺も自分の机へと向かった。

16・疑念困惑、断ち切れず

HRが終わり、一限、二限と時間はあっという間に過ぎていく。しかし、どうしても夢の事が頭から離れなかった。

曖昧な夢の、曖昧な記憶。時間が経つに連れて薄れていくその中身とは対照的に、妙な胸騒ぎが心の底に澱を成して溜まっていく。何がそう思わせるのかは分からない。朝の反応からしても、また他の人に話した所で大した反応は得られないだろう。だが、それでも俺は単なる夢と割り切って放置する気にはなれなかった。

根拠も理屈も目的も無いが、十六年越しの初夢には普通ではない何かがあるように思えて仕方がなかったのだ。

『普通の夢』なんて、それ自体が矛盾してるだろうが。夢なんて大なり小なり奇怪な点があるもんだ。

そう自分に言い聞かせて思考に区切りを打つのもこれで何度目か。とにかく次の体育のために着替えようと思ひ、鞆を探ってジャージを取り出した。

授業の開始を告げるチャイムに合わせて始まった準備体操を終え、ウォームアップに猫の額……は言い過ぎか。チワワの額ほどの校庭をだらだらと走っていた所、何者かが背後から近づいて来てそのまま俺の横を並走し始めた。

「考え事か？」

隣に位置取ったのは、これで俺と同じ速さとは思えないような軽やかなフォームで走る北瀬。運動部に所属するだけのことはある、と言ったところか。

「朝から少し様子がおかしかったが……何か問題でも起きたのか？」

首の後ろでポニーテールを上下に揺らし、ちらりとこちらに視線だけをやりつつそう話す北瀬は、どこか俺に気を遣っているようにも見える。

「いや、たいした事じゃないんだがな。ちよいと気になることがあって」

「気になること、と言つと」

とんとんとん、たつたつたつ、と異なるリズムの足音を響かせながらコーナーに差し掛かる。同じ位置関係を保つため、外側を走る北瀬は僅かにスピードを上げた。二つの足音のリズムが更に崩れる。

「今朝夢を見たんだが、その中身がやけに気になってな。何の意味もないように思えるんだが、何か意味があるように感じて」

「……あっさりと矛盾したことを言うものだな」

その顔に苦笑を浮かべつつ、僅かに茶化すような口調で北瀬はそう言った。

「仕方ないだろ。一応『思った』と『感じた』で分けたし、その辺は察してくれ」

「今時ブルース・リーでもないだろう」

「考えるな感じろ、ってか。んなつもりで言ったわけでも無いんだが」

軽口を交わしながら、比較的ゆったりと校庭を回る。別にタイムを計るでも無く、全員揃って走らなければならぬ訳でもない。規定数だけ回ればそれでいいのだから、各々自分に合ったペースのんびりと走っている。

と、コーナーを曲がり切った辺りで背後から亮二が追い付き、かと思えばそのまま驚異的な速度で駆け抜けて行った。

それから更に二、三人、亮二と仲の良い、いわゆる『悪友』と呼ばれる所の奴らが何かぎゃーぎゃーわめき立てながらその後を追い掛けていく。……何やってんだあいつらは。

「ま、些細なことだよ。別に今後の人生に関わるような事でも無いし、なんか適当な理由でも見付けて納得するさ」

何でもないことを主張するように、冗談めいたそぶりを交えつつ意識して軽い口調で話す。

「……ほう。ならば、その適当な理由とやらは一体いつになれば見
つかるんだ？」

だが、北瀬には大して効果が無かったようだ。

コーナーを曲がりきり僅かにテンポを遅らせた足音が再び両者の
間に響く。

「朝から今までずっと考え続けて、それでも納得が行かず、思考を
放棄しようにも何故か心から離れない。……それは、本当にたいし
た事のない話なのか？」

「……結局は夢の話だぜ。現実になんかどうなる訳でもなく、そもそもど
うあがいても正解なんか出やしないし分かりもしない。それでも気
になるってんなら、考えるのが面倒になるまでとことん付き合っし
かないだろ」

「つまらないことで自分が勝手に悩んでいるのだから、それをわざ
わざ他人に相談する資格も無い、と」

「おう。……間違っただろ」

「間違っただろ。正しいのか？」

しばしの沈黙。短い直線を抜けて再びコーナーに差し掛かる。

「……ま、いいさ。誰かに話せばきつと楽になるだなんてお決まり
のセリフを言っつもりは無い」

ただ。と、そう前置きして

「いつまでもそう困った顔で悩んでくれるなよ。友達の辛そうな表情など、見ていて気持ちの良いものではないのだから」

「……ああ。悪いな、北瀬」

「とりあえず今は頭より体を動かせ。適当に汗をかいて走り回っていれば多少はその煮詰まった頭もほぐれるだろうさ」

そう言い残すと北瀬はペースを上げ、軽やかなフォームでぐいぐいと先を走っていった。

そのまた先に目をやれば、走り終えた亮二とその連れ巻きたちがぎゃあぎゃあとなにやら騒ぎ、有名スポーツブランドのジャージに身を包んだ中年の体育教師に注意を受けていた。

「……つたく、何なんだかな……」

ふう、と一つ大きな息を吐き、それから僅かに視線を上げる。

それから、のろのろと走るクラスメイトたちに紛れて揺れるポニテールを何とはなしに見つめ続けていた。

16・疑念困惑、断ち切れず（後書き）

大分短くなってしまいました。とりあえず放置するつもりはないという意思表示ということ。納得していただけたらと……。リアルの方も少しずつ落ち着いてきましたので、最低月一更新という今までのペースは取り戻せそうです。

……それでも遅いとか、そんな話は受け付けませんっ

17・電腦遊戲、初級編

人付き合いがいいほうかと問われたなら、俺はまあそれなりにとは答えるだろう。自分の予定をキャンセルしてまで人に合わせることもないし、逆にたいした理由もなく面倒だからと断ることもない。そんなわけで、バイトもない暇な放課後にいつもの野郎四人組で集まって駅前で遊ぼうと誘われたとき、俺は二つ返事で了承する以外の選択肢は思い付かなかった。

授業を終えた他の生徒たちの大半が部活に向かう中、ぱらぱらと自転車置場へと向かう帰宅部の連中に紛れてたらたらと歩いていると、一年の置場のところで自転車を引っ張り出しているちまい人影が見えた。

「純、お前もう帰るのか？」

背後から声をかけると、純は自転車をがたがたと揺らして隙間なく並べられた列から引きずり出そうとする手を止め、振り返ってから必要以上に大きな声を出す。

「あ、先輩！ はい、今日は部活も休みですし残ってやることもないので」

「そうか。ところでお前、んな出し方してるとドミノ倒しになりかねんぞ。出してやるからちよいとのけ」

「あ、え」

自転車を挟んで純と逆側に入り込むと、サドルとハンドルを持つ

て持ち上げる。隣の自転車に引つ掛かって最初は強い抵抗があったが、ガコン、という音がした後はスムーズに引き抜けるようになり、そしてそのまま前輪を転がして列の外に出す。

「すみません先輩、助かりました」

「なに、こっちは慣れてるからな」

純は普段吹奏楽の練習で遅くまで残っているだろうし、こっぴつ窮屈なところから自転車を出すのには慣れていないのだろう。

「あの、ところで」

「なにかね」

「みなさんお揃いのようですが、これからどこか遊びにでもいくんですか？」

「ん？ まあな」

背後をちらとみれば、無表情の那佐とにこにことした徹とにやにやとした亮二が並んでいた。亮二、取り敢えずあとで滅す。

「特に何をしようっていうわけでもないんだけど、今日はみんな暇だからさ。駅前でも適当にぶらぶらしようってことになって」

「良かったら純ちゃんも一緒に来ない？ 大丈夫、恐くないから…
…お、おにいちゃんがいいところ連れてってあげグフオッ！」

「……亮二、冗談にしてももう少しマシな誘い方しとけ」

無言で鳩尾に正拳突きを叩き込むこいつもこいつだが。しかしまあ、随分とパワフルに育ったものだ。うん。
……妹のようにはならなきゃいいが。

ゲーセン、すなわちゲームセンターという単語を聞いて眉をひそめる人はそう少なくもないと思う。

ごちゃごちゃした空間に所狭しと並べられた筐体からは喧しい程に大音量のBGMやSEが垂れ流され、ぎらぎらと目を痛めそうな下品な発色で満たされた画面の前には、一体いつ働いているのか、そもそも職に付いているのかも分からない程にゲームにのめりこんだ、いわゆるゲーマーという人種が多数たむろっており、一種の無法地帯と化した空間の中でその廃人としての度合いを比べあっている、なんてイメージを持っている人……はまあ、今はもう流石にいないだろうが。

それでも、何か不健康な匂いを感じてなんとなく敬遠している人は多いと思う。俺も子供の頃は友達とゲーセンに行かないよう親から強く言われていたものだ。

しかし、今のゲーセンは行ってみれば分かるだろうが、それほど

暗いイメージのあるものではない。

店内を満たす大音量のBGMは今も変わらないが、女性向けのUFOキヤッチャーやプリクラが増え、またCOM相手の一人黙々とやるようなゲームからネットワーク通信により全国の相手と戦えるクイズゲームやカードゲームなど、バリエーションが色々と増えて来ているのだ。

まあ、それでも未だにゲーマーと呼ばれる人種も存在しているが、一見さんお断りな雰囲気はほぼ一掃されたといっても過言ではあるまい。

というわけで現在、駅前にあるの大手チェーンのゲーセンに来て
いるわけだが。

「うおおおつ、喰らえ必殺、神速号令ッ！」

「……………」

「フハハハハ！ どうだ那佐、手も足も出るまい！ そうやって城
の中に引きこもったところで落城の運命は…………え、うましか？」

「…………ぼちつとな」

「ちよつ、おま、擬装単色とかマジ有り得な…………ギャー！ 俺の騎
馬隊が一瞬で消し炭にっ！」

「あーあ、全員城壁に貼付けたりするから……………」

うむ、こりゃ落城コースだな。ただし亮二ののだが。

バリンバリンと音を立てながら削られていく亮二の城ゲージを眺
めつつうんうんと頷いていると、純が横から話しかけてきた。

「先輩、あの人形取ってください」

「空気を読まずいきなり可愛いげのない台詞を吐きやがるな貴様は」

こやつには俺が二人の戦いを観戦しとるのがわからんのか。

「いや、もう終わりじゃないですか」

「終わってない、終わってないよ純ちゃん!? あ、ちょ、ここで雄飛チャージとか……」

終わったな。

「もうちょっとで取れそうなんですけど、なんだかうまく行かないんですよ。それで先輩に見て欲しくって」

「あー、分かったよ。んで、どれのことだ?」

ちょこちょこ早足で歩く純の後ろに付いていくと、その先には小さなウサギのぬいぐるみの並べられたキャッチャーがあった。

「俺もあまり得意ってわけじゃないんだけどなあ……ま、やってみるかね」

「はいっ、お願いします先輩」

硬貨を入れ、一つだけ向きのずれているウサギを狙う。確かに取れ易そうな配置に見えるが……。

ぴよろろろーという気の抜けた効果音と共にアームが下がり、ウ

サギを襷掛けに掴む。これは取れたかと思ったが、持ち上げる途中でずるりと抜けてしまった。

「む、駄目か」

「いつも思うんですけど、UFOキャッチャーのアームの力って弱すぎる気がするんですよ。セコいです、アコギです」

結構な金を既に注ぎ込んでいるのか、純の声にはやや刺が含まれている。つかお前今後ろに店員いたぞ、俺が苦笑いされたし。

「ま、少しは穴に近づいたし、もう何回かやれば取れるんじゃないか？」

「一回で取れるようにしておいてほしいですけどね」

「それは同感だがな……っ」と

純の苛立ちが機械に伝わったのか、アームはウサギの腰を捕らえ、危なげにそのままふらふらと持ち上げた。

ぱすん、と軽い音を立てて落ちてきたウサギを取り出すと、隣にいるやつにほれ、といいながら手渡す。

「……なんか嬉しいような悔しいような、複雑な気分です」

地道にずらして来たのが最後には普通に持ち上げられたのが気に入らないらしく、言葉通りの表情をしながらぼそりと呟かれた。

「ほう、ならば一つそいつに希少価値を付けて喜ばせてやるっ」

「？ なんですか？」

「そいつは、俺からお前への初めてのプレゼントだ。大事に受け取るがいい」

そういつと純は、はっと何かに気付いたようにすると、ワッペンが遅れて慌てだした。

「あ、あああの、先輩っ！？」

「ん？ どうかしたか？」

「いえ、そ、そのっ！ ありがとうございますっ！」

ぎゅっとウサギを両手で抱き……というよりは締め潰しつつ、純は大袈裟に頭を下げた。

「先祖代々家宝にしますっ！」

「いや、歴史を捏造するな」

大袈裟すぎるっの。

17・電脳遊戯、初級編（後書き）

えー、世の中には三国志大戦というゲームがありました（爆発音

というわけで一月が120日あると噂される怠惰でございます。狙いは出来れば頭か心臓で……ちょ、手足はやめてっ！ やるならー思いにやってえ！

しかし、季節が丸々一つ過ぎるまで放置してしまっただけですが、その間に作品コードの最後の文字がEに……この作品なんかもう骨董レベルの古さですね。時の流れを感じます。

内容は相変わらずすぐだぐだぐですが、宜しければこれからもお付き合い頂ければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942c/>

等身大に、奇々怪々

2010年10月10日19時27分発行